

大和郡山市文化財調査報告書第10集

筒井城第7次発掘調査報告書

2006

大和郡山市教育委員会

筒井城第7次発掘調査報告書

例 言

- 1 本書は、大和郡山市筒井町字北垣内1503で実施した発掘調査の報告書である。
- 2 調査は、筒井城跡の範囲確認調査として実施した。
- 3 調査期間、調査面積は下記の通りである。

調査期間：2004年1月19日～3月31日

調査面積：約260㎡

- 4 調査は、以下の組織で実施した（所属は当時）。

現地調査

調査員：山川均（大和郡山市教育委員会 社会教育課）

補助員：岡本智子（奈良大学大学院）、下高大輔、春日伸康（以上奈良大学）、竹内直子

事務

大和郡山市教育委員会 社会教育課

- 5 本書は、以下の分担で作成した（所属は当時）。

製図・拓本・トレース：下高大輔、長谷川義明（以上奈良大学大学院）、藤田葵、大江綾子（以上奈良大学）、山川

写真撮影：山川、長谷川、大江

執筆：長谷川（Ⅲ章①）S.D-01出土遺物）、山川（その他）

編集・レイアウト：山川

- 6 調査および報告書作成に際し、伽藍興寺文化財研究所・佐藤重聖氏より貴重な御教示・御指導を得た。
- 7 調査に関わる写真・スライド・実測図および出土遺物は全て大和郡山市教育委員会で保管している。広く活用されたい。
- 8 現地調査に際しては、土地所有者の奥田良彦氏および筒井順慶顕彰会（会長・藤本賢司氏）より多大な御協力を得た。

凡 例

- 1 遺構実測図に示した標高は、全て東京湾平均海面（T.P）からのプラス値である。
- 2 遺構実測図中の座標は、世界測地系に基づくものである。また、図中矢印で示した方位は座標北を示す。
- 3 遺物番号は全て通し番号になっており、実測図・観察表・図版それぞれの対照が可能である。
- 4 遺物実測図の断面は、陶磁器・須恵器がベタ塗り、瓦器・瓦質土器・瓦がアミがけ、土師器は白抜きとされている。
- 5 土色および遺物の色調に関しては、『新版標準土色帳』に拠る。

本文目次

I 調査の契機および経過	1
II 調査の概要	
(1) 調査区の設定	2
(2) 第1トレンチ	4
(3) 第2トレンチ	13
III 遺物	
(1) 第1トレンチ出土遺物	15
(2) 第2トレンチ出土遺物	45
IV まとめ	49

図目次

図1 調査地点位置図 (S : 1 / 25,000)	1
図2 トレンチ配置図 (S : 1 / 2,500)	1
図3 調査前の状況 (第1トレンチ, 東より)	2
図4 調査前の状況 (第2トレンチ, 東より)	2
図5 検出遺構略図 (S : 1 / 200)	2
図6 第1トレンチ遺構平面図 (S : 1 / 100)	3
図7 SE-01平面図・断面図 (S : 1 / 50)	4
図8 SE-01土層断面 (東より)	4
図9 SE-01井戸枠 (西より)	4
図10 埋塞-01平面図・断面図 (S : 1 / 20)	5
図11 埋塞-02平面図・断面図 (S : 1 / 20)	5
図12 埋塞-01 (南より)	5
図13 埋塞-02 (東より)	5
図14 SX-01土層断面図 (S : 1 / 50)	6
図15 SX-01南北断面図 (S : 1 / 50)	6
図16 SX-01 (右) およびSX-02 (東より)	6
図17 SX-01 (手前) およびSX-02 (北より)	6
図18 第1トレンチ南壁土層図1 (S : 1 / 50)	7
図19 第1トレンチ南壁土層図2 (S : 1 / 50)	7
図20 SK-01土層断面図 (S : 1 / 20)	8
図21 SK-02土層断面図 (S : 1 / 20)	8
図22 SK-03土層断面図 (S : 1 / 40)	8
図23 SX-03土層断面図 (S : 1 / 20)	8
図24 石垣-01立面図 (S : 1 / 40)	9
図25 石垣-01 (西より)	9
図26 第1トレンチ (東半, 北より)	10
図27 第1トレンチ (西半, 北より)	10
図28 第1トレンチ (西側拡張部分, 東より)	10

図29	第2トレンチ上層遺構平面図 (S : 1 / 50)	11
図30	第2トレンチ下層遺構平面図 (S : 1 / 50)	11
図31	第2トレンチ南壁土層図 (S : 1 / 40)	12
図32	第2トレンチ下層遺構 (南より)	12
図33	第2トレンチ下層遺構 (東より)	12
図34	石垣-02立面図 (S : 1 / 40)	13
図35	石垣-02断面図 (S : 1 / 40)	13
図36	石垣-02 (東より)	13
図37	石垣-03立面図 (S : 1 / 40)	14
図38	石垣-03断面図 (S : 1 / 40)	14
図39	石垣-03 (南西より)	14
図40	埋め戻し状況 (第1トレンチ, 東より)	14
図41	埋め戻し状況 (第2トレンチ, 東より)	14
図42	SE-01出土遺物実測図① (1層) (S : 1 / 3)	16
図43	SE-01出土遺物実測図② (上段 : 1層, 下段 : 2層) (S : 1 / 3)	17
図44	SE-01出土遺物写真①	18
図45	SE-01出土遺物実測図③ (1層・軒瓦) (S : 1 / 4)	19
図46	SE-01出土遺物写真②	19
図47	SE-01出土遺物実測図④ (1層・瓦) (S : 1 / 4)	20
図48	埋裏-01出土遺物実測図 (S : 1 / 3, S : 1 / 6)	21
図49	瓦質裏写真	21
図50	埋裏-01出土遺物写真	21
図51	埋裏-02出土遺物実測図 (S : 1 / 3, S : 1 / 6)	22
図52	埋裏-02出土遺物写真	22
図53	SX-01出土遺物実測図① (1層) (S : 1 / 3)	23
図54	SX-01出土遺物実測図② (2層) (S : 1 / 3)	24
図55	SX-01出土遺物写真①	24
図56	SX-01出土遺物実測図③ (1層) (S : 1 / 3)	25
図57	SX-01出土遺物実測図④ (瓦) (S : 1 / 4)	26
図58	SX-01出土遺物写真②	26
図59	SX-02出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	27
図60	SX-02出土遺物写真	27
図61	SK-01出土遺物写真	27
図62	SK-01出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	27
図63	SK-02出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	27
図64	SK-02出土遺物写真	27
図65	SK-03出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	28
図66	SK-03出土遺物写真	28
図67	SX-03出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	29
図68	SX-03出土遺物写真	29
図69	SX-04出土遺物実測図① (S : 1 / 3)	30
図70	SX-04出土遺物写真①	31

図71	S X-04出土遺物実測図② (S : 1 / 3)	32
図72	S X-04出土遺物写真②	33
図73	S X-04出土遺物実測図③ (S : 1 / 3)	34
図74	S X-04出土遺物写真③	34
図75	S X-04出土遺物実測図④ (S : 1 / 3)	35
図76	S X-04出土遺物写真④	35
図77	S X-04出土遺物実測図⑤ (S : 1 / 3)	36
図78	S X-04出土遺物写真⑤	37
図79	S X-04出土遺物実測図⑥ (S : 1 / 3)	38
図80	S X-04出土遺物写真⑥	39
図81	S X-04出土遺物実測図⑦ (S : 1 / 3)	40
図82	S X-04出土遺物写真⑦	40
図83	S X-04出土遺物実測図⑧ (S : 1 / 3)	41
図84	S X-04出土遺物写真⑧	41
図85	S X-04出土遺物実測図⑨ (S : 1 / 3)	42
図86	S X-04出土遺物写真⑨	43
図87	S X-04出土遺物実測図⑩ (瓦) (S : 1 / 4)	44
図88	S X-04出土遺物写真⑩	44
図89	石垣-01西側堆積層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	45
図90	石垣-01西側堆積層出土遺物写真	45
図91	第3包含層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	46
図92	第3包含層出土遺物写真	46
図93	第2包含層出土遺物実測図 (S : 1 / 3)	47
図94	第2包含層出土遺物写真	47
図95	出土銭貨拓影 (S : 1 / 1)	48
図96	出土銭貨写真	48
図97	石造物 (反花座) 実測図 (S : 1 / 10)	48
図98	石造物 (反花座) 写真	48
図99	調査地周辺の空中写真 (昭和38年、S : 1 / 1,500)	49
図100	消された印銘	50

表 目 次

表1	遺物観察表①	51
表2	遺物観察表②	52
表3	遺物観察表③	53
表4	遺物観察表④	54
表5	軒丸瓦計測表	55
表6	軒平瓦計測表	55
表7	丸瓦・平瓦計測表	55
表8	銭貨計測表	56

I 調査の契機および経過

戦国時代の大和国人を代表する存在である筒井氏の居城・筒井城は東西約500m、南北約400mの規模を誇り、中世平地城館としては全国でも屈指の存在である。近鉄筒井駅に隣接し、国道25号線が城跡のすぐ南を通るなど、大都市圏への交通が至便の地域に存在するにも関わらず、その主郭と目される部分や堀跡などを比較的良好に残していることが特徴である。また、『大乘院寺社雑事記』や『多聞院日記』など、当時の一般史料中において筒井城や筒井氏についての記載が頻出する。

このように遺構・文献の両面において恵まれた存在である筒井城においては、平成14年度に大和郡山市教育委員会が「筒井城総合調査」を実施し、その成果は翌年度に『筒井城総合調査報告書』（大和郡山市教育委員会・城郭研究会編）として纏められた。しかし、こうした中でも発掘調査による地下遺構の確認は決して進んでいるとはいえず、その点を補うために大和郡山市教育委員会では平成14年度より範囲確認調査を実施してきた（『筒井城第5次発掘調査報告書』2004）。今回の発掘調査はその第2回にあたるもので、平成15年度国庫補助事業として実施したものである。調査は平成16年1月19日に開始し、同年3月31日に終了した。調査面積は総計で約260㎡であるが、一部で下層遺構の調査も実施しており、実質的な調査面積はこれを若干上回る。

調査対象地については、地籍図等を用いた城下復元研究によれば筒井家家臣の居住した区域の一角と考えられており、かつ西側では外堀の一部も対象地内に含まれるとされている。本調査以前の筒井城跡における既往の調査は、主郭と推定される字「シロ畠」周辺に集中しており（『筒井城総合調査報告書』参照）、家臣の居住地や市場などの城下町部分において発掘調査は行われていなかった。今回の調査はそうした現状を踏まえ、屋敷地の変遷を確認することを主目的に掲げた。さらに、可能であれば外堀の状況を知ることも副次的な目的とした。



図1 調査地点位置図 (1/25,000)



図2 トレンチ配置図 (1/2,500)

II 調査の概要

(1)調査区の設定

調査対象地は、地籍図等を用いた城下復元研究によれば筒井家家臣の居住した区域の一角と考えられており、かつ西側では外堀の一部も対象地内に含まれている。調査に際しては2つのトレンチを設定したが、本報告では南側のものを第1トレンチ、北側のものを第2トレンチと称する。このうち第1トレンチでは排土処理の問題から、調査区を東西に分けて実施した。



図3 調査前の状況 (第1トレンチ、東より)



図4 調査前の状況 (第2トレンチ、東より)

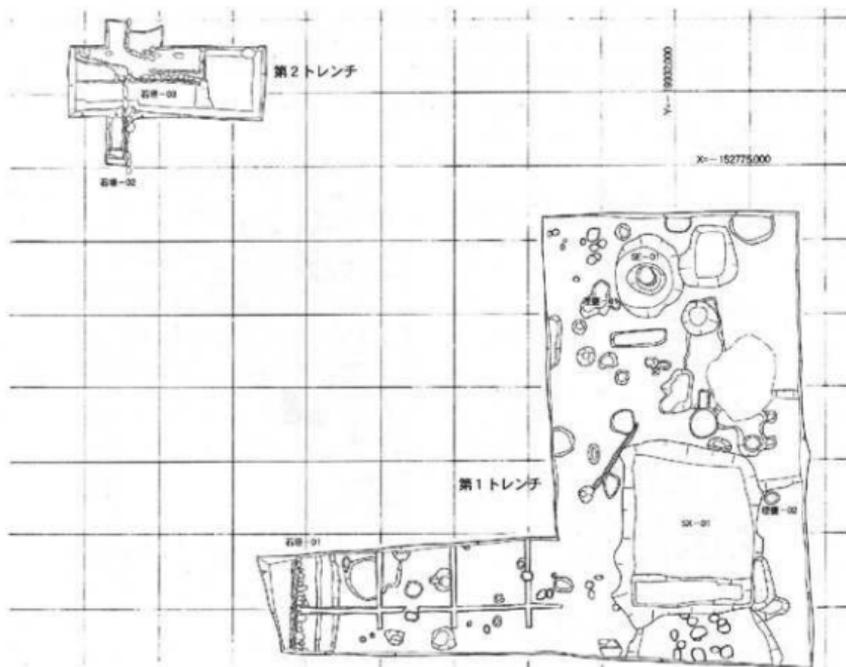


図5 検出遺構略図 (S : 1 / 200)

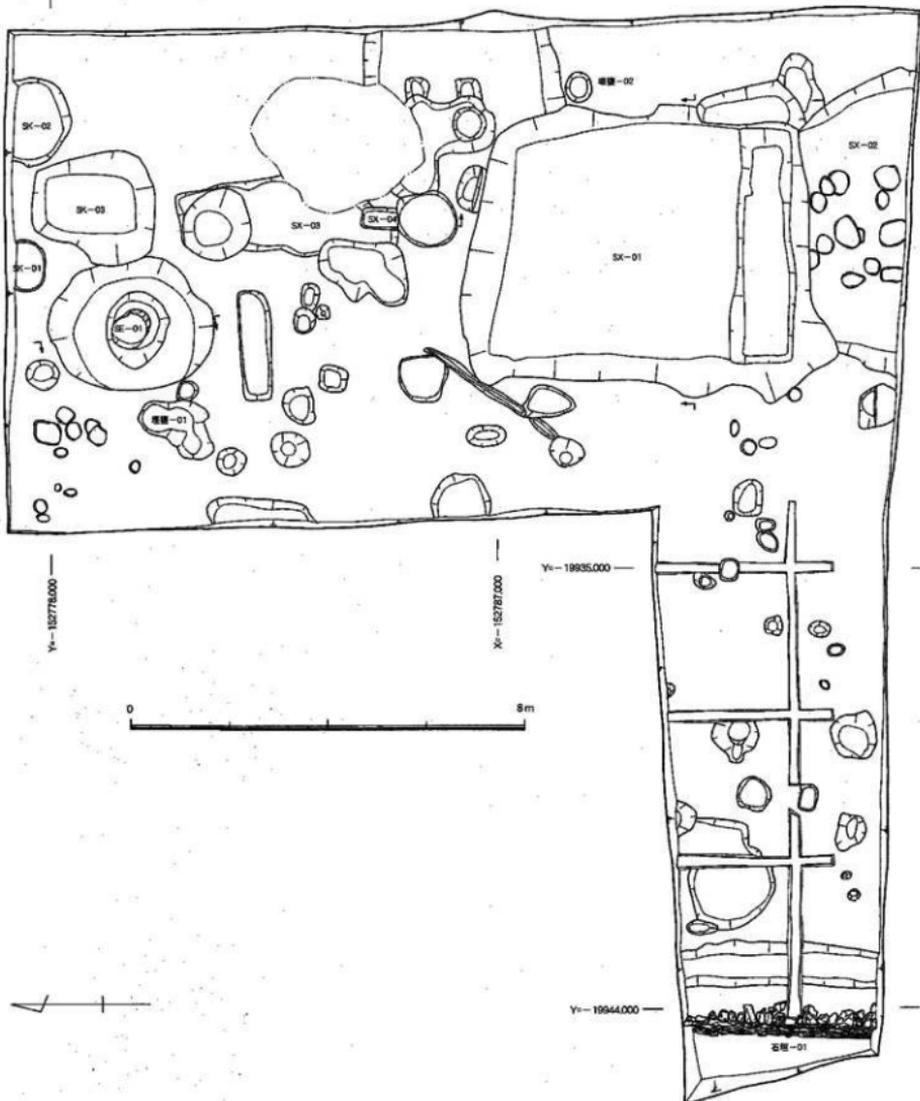


図6 第1トレンチ遺構平面図 (S : 1 / 100)

(2)第1トレンチ

層序 基本的な層序は図18・19に示した通りである。黒褐色の表土下には黄褐色を呈する地山混じりの層が見られるが、これは昭和初期に建設された屋敷（現在は葦のみが遺存していた）に伴う盛土もしくは整地土とみられる。これらを除去すると、黄灰色の地山面が露呈する。ここまでの深さは、40cm程度である。

SE-01 第1トレンチの北端に近い部位で検出した井戸である。掘方の直径は300～340cmで、土層断面図および写真（図7下・図8）に明らかなように遺構の中央付近に直径120cm程度の穴を穿ち、井戸枠を抜取っている。井戸枠は最下部のみが遺存しており、図7上および図9に見るように長さ約50cm、幅約10cmの縦板を直径約65cmの結桶状に組んだ構造である。縦板は中央付近に一重巻かれていたが、土圧により截断されていた。底面までの深さは、170cmを測る。上述のようにこの井戸は人為的に井戸枠を抜取られ、その後丁寧に埋戻されている。

出土遺物としては掘方（「2層」とする）より14世紀末を主体とする遺物が若干出土している。また、抜取り穴（「1層」とする）からは大量の瓦（図8参照）のほか、15世紀前葉の土器・陶磁器が一定量出土している。したがってこの井戸の機能時期としては、ほぼこの頃（14世紀末～15世紀前葉）を想定してよからう。また、出土遺物中に多量の瓦が見られることについては、この周辺に中世寺院が存在したか、もしくはこの井戸自体が寺院内の施設であった可能性を示す。ただし、この点については周辺の調査結果を待って慎重に判断するべきであろう。

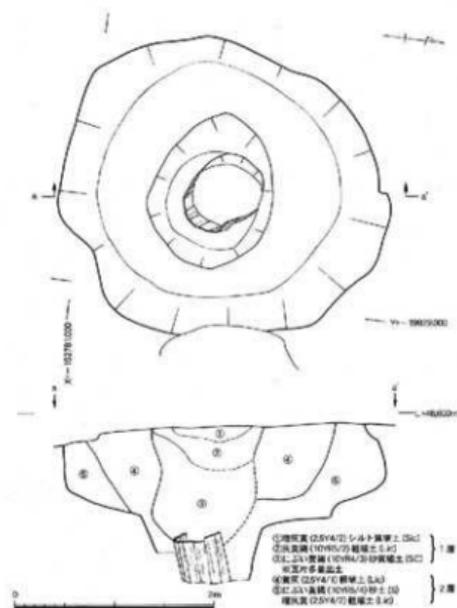


図7 SE-01 平面図・断面図 (S:1/50)

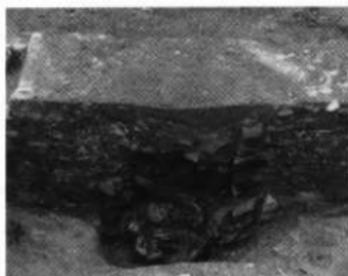


図8 SE-01 土層断面 (東より)



図9 SE-01 井戸枠 (西より)

埋壺-01 浅い土坑に東西を挟まれるような形で検出された埋壺遺構である。主体には底径が約25cmを測る瓦質土器甕を使用していた。甕を据えるための掘方は検出されておらず、東西の土坑との関係も不明である。甕は体部より上が欠損しており、底部のみが遺存している状態であった。共伴した遺物には瓦質土器火鉢や信楽焼插鉢、唐津焼鉢などがあり、時期は17世紀前葉と考えられる。なお、遺構の性格については不明である。

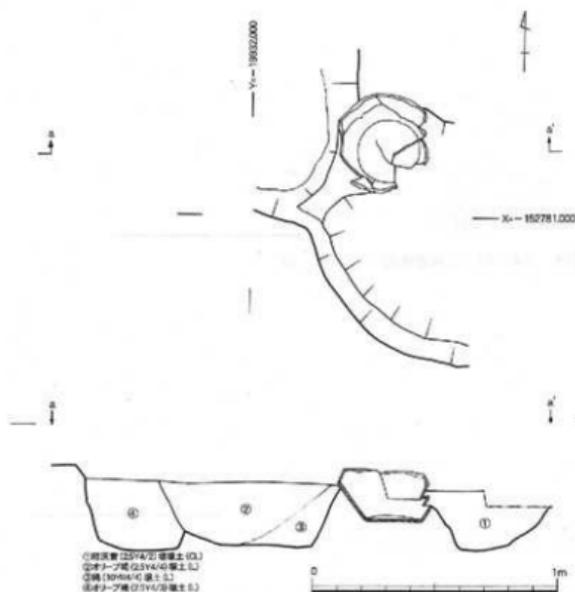


図10 埋壺-01 平面図・断面図 (S : 1 / 20)

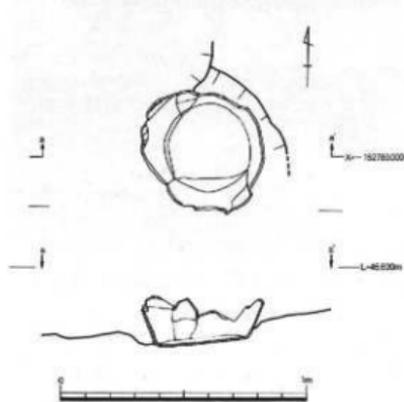


図11 埋壺-02 平面図・断面図 (S : 1 / 20)

埋壺-02 主体に底径約40cmの瓦質土器甕を使用した埋壺遺構である。甕の底部には意図的な穿孔が見られることから、液体を貯蔵した施設である可能性は低い。体部より上はほとんど失われており、甕を据えた掘方も判然としない。甕の内容土から土師器羽釜や初期伊万里碗が出土しており、17世紀前葉の時期観が与えられる。



図12 埋壺-01 (南より)



図13 埋壺-02 (東より)

S X-01 東西約550cm、南北約700cmを測る長方形の大型土坑である。深さは検出面から約75cmを測るが、遺構の南端ラインに沿う形で幅約120cmの帯状の範囲がさらに約50cm掘り下げられていた。遺物としては17世紀末～18世紀初頭の陶磁器や土師器、瓦の中に、16世紀後葉の遺物が若干含まれている。このうち後者については、混入の可能性が指摘できる。遺構の性格については、半地下式の蔵と考えるのが妥当であろう。瓦が一定量出土していることから、瓦葺建物であったと判断される。

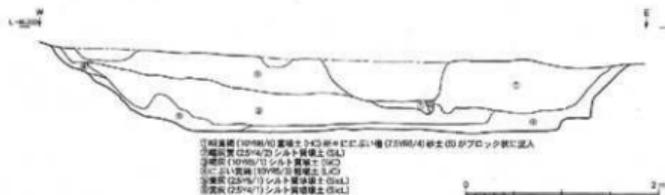


図14 SX-01 土層断面図 (S = 1 / 50)

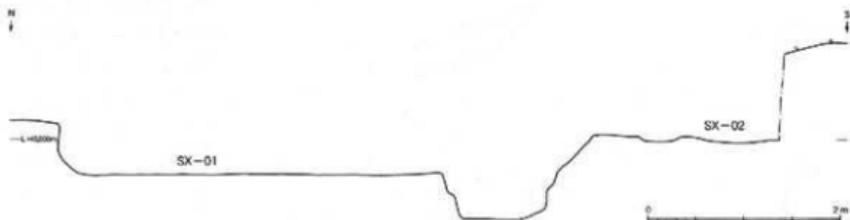


図15 SX-01 南北断面図 (S = 1 / 50)

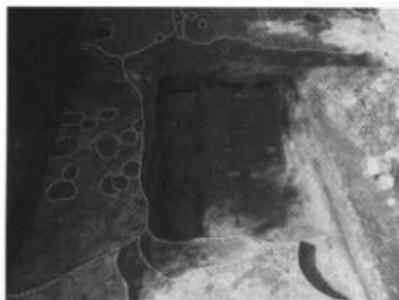


図16 SX-01 (右) およびSX-02 (東より)

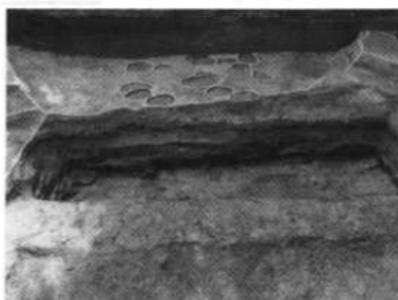


図17 SX-01 (手前) およびSX-02 (北より)

S X-02 東西幅が最大で約630cmを測る大型の土坑である。北を先述のS X-01によって切られており、南は調査区外になるため、正確な平面形態は不明である。深さは検出面より約50cmを測る。出土遺物から本遺構の時期は14世紀末～15世紀初頭と思われる、その性格については、不明である。なお、遺構基底部より検出されているピットは本遺構に関係するものではない(時期不明)。

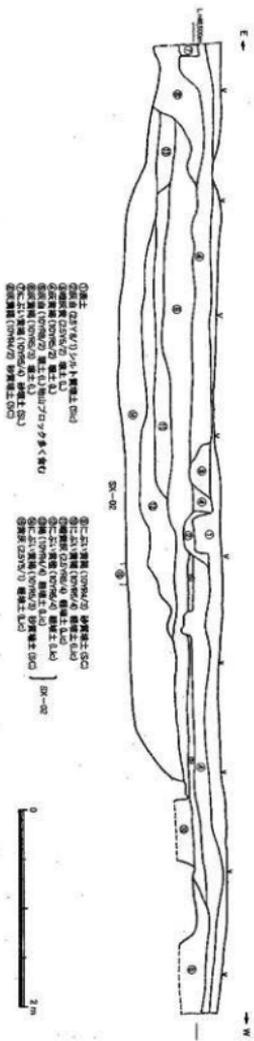


図18 第1トレンチ 南壁土層図1 (S=1/50)

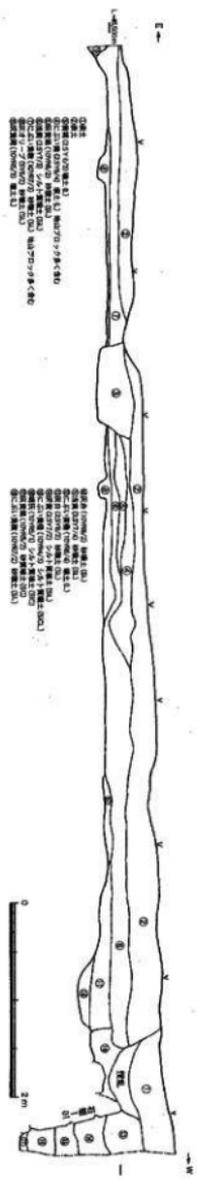


図19 第1トレンチ 南壁土層図2 (S=1/50)

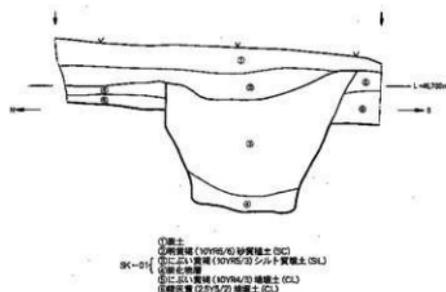


図20 SK-01 土層断面図 (S : 1 / 20)

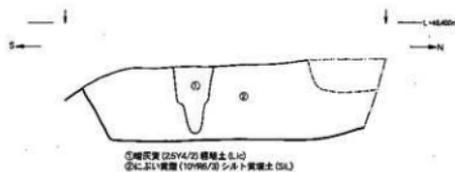


図21 SK-02 土層断面図 (S : 1 / 20)

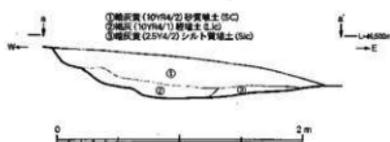


図22 SK-03 土層断面図 (S = 1 / 40)

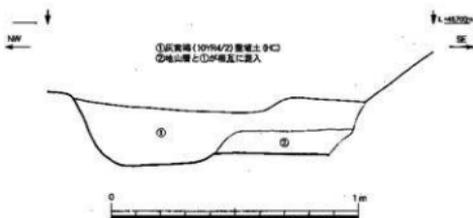


図23 SX-03 土層断面図 (S = 1 / 20)

SK-01 南北方向の直径が約110cmを測る円形の土坑である。遺構の西側は調査区外になる。深さは検出面より約60cmを測る。埋土は最下部に薄い炭化物層があり、それより上は人為的に一気に埋戻されている。出土遺物はごく少ないものの、遺構の時期は幕末頃と推定される。

SK-02 南北方向の直径が約180cmを測る円形の土坑である。遺構の西側は調査区外となる。深さは検出面から約60cmを測る。人為的に埋戻されており、遺構の中心よりやや南寄りに柱痕状のセクションが見られる。遺構の時期は、17世紀前葉と思われる。

SK-03 長径約250cm、短径約180cmを測る、長円形の土坑である。深さは検出面から約70cmを測り、断面の形状は明確な段を持たず、浅鉢状を呈するため、土坑というよりは浅い落ち込みのような印象を受ける。出土遺物より、18世紀後葉の遺構と考えられる。

SX-03 東西約150cm、南北約440cmを測る、長方形の土坑である。深さは検出面から約20cmと、面積に比較して浅い。遺構の北は近代以降の井戸によって破壊されていた。また同じく東側は立木のため調査できなかった。18世紀前葉の遺構と思われる。

S X-04 先述のS X-03を切る形で、その南端付近に掘り込まれた長方形の土坑である。東西一辺は約45cmを測る。南北は約65cmを測るが、南端部分は近代以後の土坑によって破壊されていた。深さは約30cm。それほど大きな土坑ではないが、ここからコンテナ約10箱に及ぶ遺物が出土している。時期は幕末で、当時の土器・陶磁器組成を知る上で貴重な遺物群となっている（29～45頁参照）。遺構の性格としては、災害や引越などに伴うゴミ穴の可能性が強いが、一世帯で使用された陶磁器としてはやや分量が多い印象を受ける。

石垣-01 第1トレンチ西端付近において検出された、南北方向の石垣遺構である。使用されている石材は最大でも長辺が50cm程度の小ぶりなもので、それを落とし積みとし、最下部には駒木を据える。傾斜角は約78°である。高さは約1mを測り、今回はそれを幅約3.5m分調査した。時期は、近代以降のものと思われる。本遺構は屋敷地の西端を画する石垣と推定されるが、ここから西は筒井城の外堀推定地にあたることから、比較的近年に至るまでその東肩のラインが生きていたことを示す遺構といえよう。

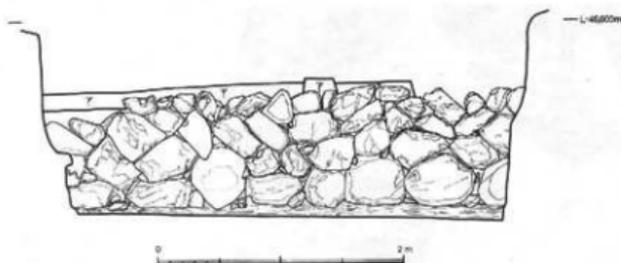


図24 石垣-01 立面図 (S : 1 / 40)



図25 石垣-01 (西より)



図26 第1トレンチ (東半、北より)



図27 第1トレンチ (西半、北より)



図28 第1トレンチ (西側拡張部分、東より)

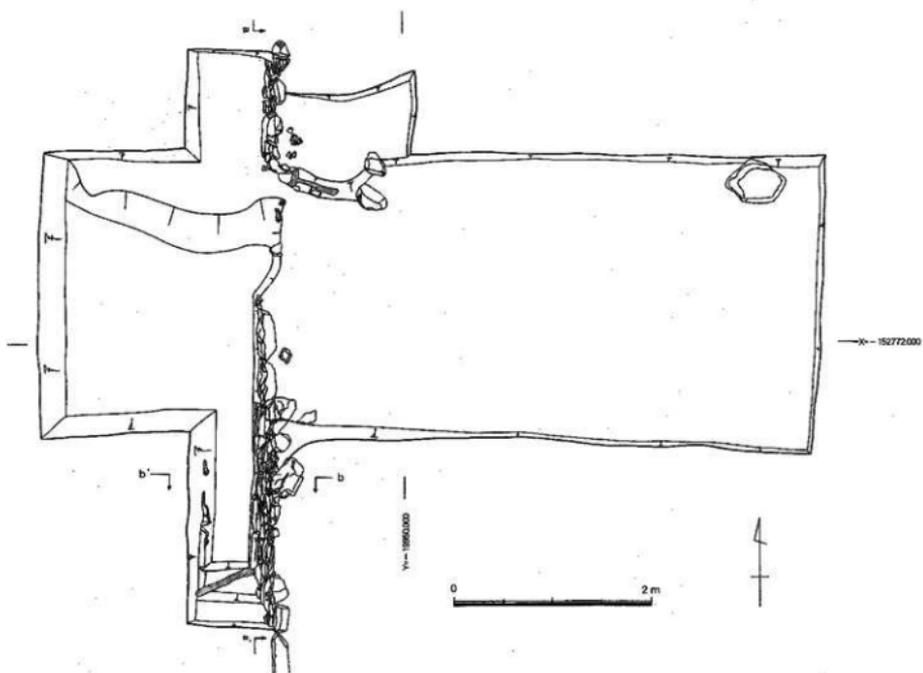


図29 第2トレンチ 上層遺構平面図 (S: 1/50) [トーン部分は根]

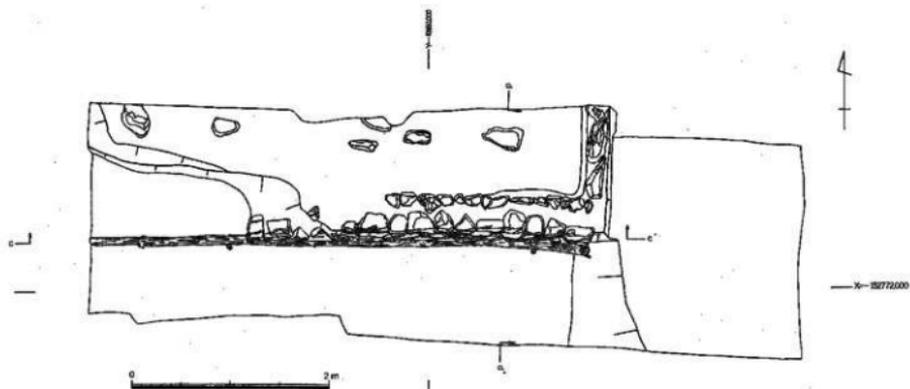


図30 第2トレンチ 下層遺構平面図 (S: 1/50)

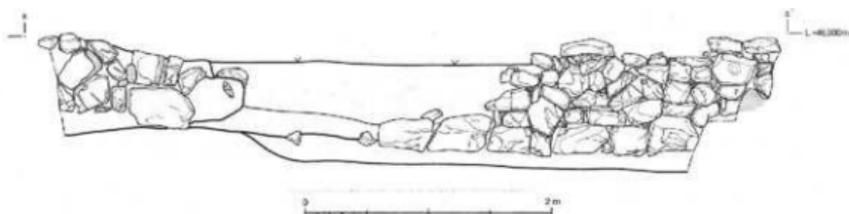


図34 石垣-02 立面図 (5:1/40)



図35 石垣-02断面図 (5:1/40)



図36 石垣-02 (東より)

(3)第2トレンチ

石垣-02 第2トレンチ東端付近において検出した南北方向の石垣遺構である(検出長約6m)。胴木は用いず、長辺が40cm程度の石を並べた上に、それよりやや小ぶりの石を落とし積みにするもので、高さは約80cmを測る。傾斜角は約78°を測り、先述の石垣-01に一致する。幕木の堆積層(図31-第2包含層)を切り込む形で構築されており(第1包含層)、かつその際の石垣基底部は18世紀前葉の遺物を包含する層(第3包含層)上面となる。したがってその構築時期は石垣-01と同様に近代以後ということになる。性格としてはやはり屋敷地の西を画する施設と推定される。また、これより東は筒井城外堀推定地にあたるが、作業安全上の理由から今回の掘り下げは中世包含層まで及んでいない。

石垣-03 上記の石垣-02の下部から検出された東西方向の石垣遺構である(検出長約6m)。西側は石垣-02によって破壊されていた。胴木を据え、その上に長辺約40cm、短辺10~15cm程度の石材を3段積み上げている。高さは約50cm、傾斜角は約71°を測る。性格としては、調査地北側の道路(現有道路にほぼ重なるものと思われる)南端を護岸する施設であったと思われる。すなわち石垣-02が築かれる以前は、ここから南が外堀であったことになる。今回はこの石垣-03の東端部分を調査しており、そこからすぐ東は第4包含層が盛り上がる形で堀の肩となっている。したがってこの時期においては、外堀の東端はこのラインということになり、石垣-02の段階(近代)ではそれが約3m西に移動したということになる(つまり、屋敷地が拡大している)。次にこの石垣-03の時期であるが、本遺構と有機的な関係にある第4包含層に包含されていた肥前陶磁器の時期観から見て、おおむね17世紀後葉と考えられる。

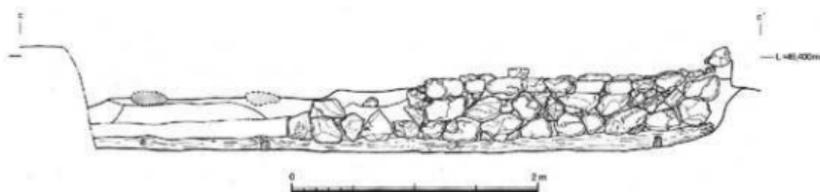


図37 石垣-03立面図 (S : 1 / 40)

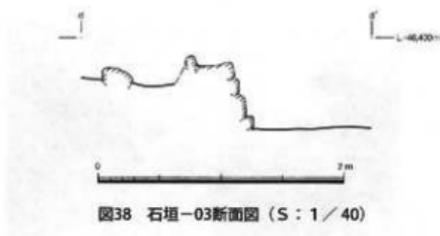


図38 石垣-03断面図 (S : 1 / 40)



図39 石垣-03 (南西より)



図40 埋め戻し状況 (第1トレンチ 東より)



図41 埋め戻し状況 (第2トレンチ 東より)

Ⅲ 遺物

(I)第1トレンチ出土遺物

SE-01 1層出土遺物 1,2は瓦質土器の火鉢である。1は平面円形で、いわゆる浅鉢である。外面の2つの突帯の間に花菱スタンプを押印する。口縁上端はケズリであるが、内面はヨコナデで仕上げる。2は平面方形で、外面に菊花文スタンプを押印する。3は瓦質土器の風炉である。平面円形で、外面に花菱スタンプを押印する。外面の体部はケズリ、内面はヨコナデで仕上げる。4は大型香炉の脚部と考えられる。装飾の施されている部分以外は、内外面とも丁寧にケズリを行う。5は瓦質土器の火鉢と考えられる。外面の突帯の上下に七宝文の中に花菱を配するスタンプを押印する。6は瓦質土器花瓶の口縁と考えられる。器壁は大部分が摩滅しているものの、内面の一部にはヨコハゲが認められる。7,8は瓦質土器火鉢の脚部である。いずれも平面方形で、7は小型のもの、8は大型のものである。いずれも粘土板を組み合わせて貼り合わせた後、接合部分をナデ、体部をケズリによって仕上げている。9は瓦器碗の底部である。川越編年のⅡ-B期(川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983)に該当し、12世紀前葉のものである。SE-01の1層から出土した他の遺物よりも2世紀以上古く、混入と考えられる。10~13は瓦質土器の搥鉢である。10~12はいずれも口縁を丸くおさめ、外反はしない。口縁付近はヨコナデを施し、体部外面にはユビオサエがみられる。10. 12はいずれも搥目が残るが、1単位当たりの条数は明らかではない。11は片口が残存し、搥目は1単位あたり4条。13は口縁に面をもち、器厚も13mmと非常に厚い。搥目は1単位あたり5条。瓦質搥鉢近江編年の2期(近江俊秀「大和瓦質搥鉢考」『由良大和古代文化研究協会研究紀要』2,1994)、佐藤編年のB期(佐藤聖聖「大和における瓦質土器の展開と前期」『中近世土器の基礎研究』Ⅻ,1996)に該当する。14,15は土師器の皿である。いずれも体部下半を強く押圧して器壁を屈曲させ、口縁部をヨコナデする。いわゆる「へそ皿」と考えられるが、いずれも底部は残存せず、断定はできない。16~18は土師器の羽釜である。いずれも菅原分類の大和H3型(菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983)で、口縁部を内傾させ、上面を強くナデすることによって浅いくぼみをつくる。18は、口縁をヨコナデし、体部内面にはタタキの痕跡が明瞭に残る。19は陶器の平碗である。体部下半は露胎し、回転ヘラケズリが明瞭に認められる。高台は貼り付けているが、高台周辺に削り込みも施す。高台内の底部外面中央の切り離し痕跡はロクロナデによって消されている。古瀬戸後期の1期(藤沢良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期様式の編年一」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅹ,1991)、14世紀後半のものである。20は東海系の須恵器で、垂の底部と考えられる。内面はロクロナデ、外面は回転ヘラケズリで仕上げる。底部もヘラケズリによって成形し、高台は貼り付けている。21は常滑焼の甕である。口縁は断面「N」字状を呈し、中野編年の6 a型式(中野晴久「常滑・渾美」『畿内中世の土器・陶磁器』中世土器研究会,1995)で13世紀第3四半期のものである。

以上のようにSE-01の1層は、瓦器碗や常滑焼の甕など、若干古い遺物も混入しているものの、瓦質土器搥鉢・火鉢などの年代観から、14世紀末から15世紀前半と考えられる。

2層出土遺物 22,23は瓦質土器搥鉢である。22は、口縁端部がやや内側に傾斜し、端部外面はヨコナデであるが、外反はしない。23は直線的な体部を持ち、口縁は面を持ち、わずかに内側に傾斜する。24は瓦質土器火鉢である。いわゆる深鉢であり、平面円形。外面には四菱スタンプを押印する。口縁付近は比較的広くヨコナデを施す。25は瓦質土器搥鉢である。端部を丸くおさめ、外反はしない。外面にはヨコハゲが顕著に見られる。

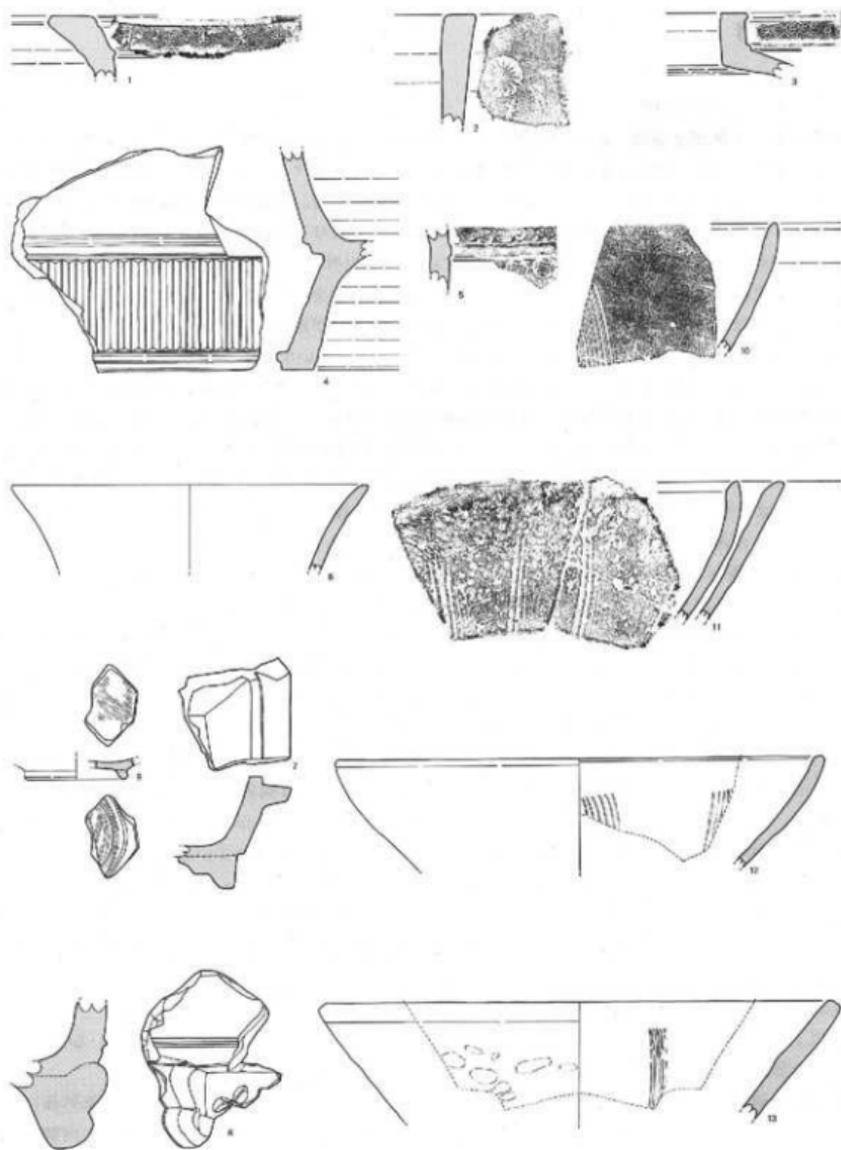


图42 SE-01出土遗物实测图① (1层)

これらの2層の土器群には、瓦質播鉢の近江編年の2期、佐藤編年のB期、14世紀末から15世紀前半の年代が与えられる。

SE-01出土瓦 K1、K2はいずれも右三巴文軒丸瓦であり、同范である。K3～K6は連珠文軒平瓦である。K4、K5、K6の内区左端には范傷があり、同范関係が認められる。K7～K9は均整唐草文軒平瓦である。K3、K6～K9はいずれも瓦当貼り付け技法であり、長軸方向にナデをおこない、頸の裏面をヨコナデする。K4、K5、K6にはいずれも、凸面広端の頸部との境に、凹型台の圧痕がみられる。K10～K14は丸瓦である。すべて、凹面には糸切り痕跡が明瞭に見られる。K13は凸面の全面に丁寧なミガキを施すが、K10、K11、K12、K14は、凸面のナデ・ミガキが徹底されず、一部に綱目が残る。K15、K16は平瓦である。K15は凹面を短軸方向にナデ、凸面は糸切り痕跡が明瞭に残る。K16は凹面がミガキ、凸面が長軸方向にナデで仕上げる。K17は雁振瓦である。凸面には糸切り痕跡・布目痕跡が明瞭に残る。凹面は丁寧なミガキで仕上げる。

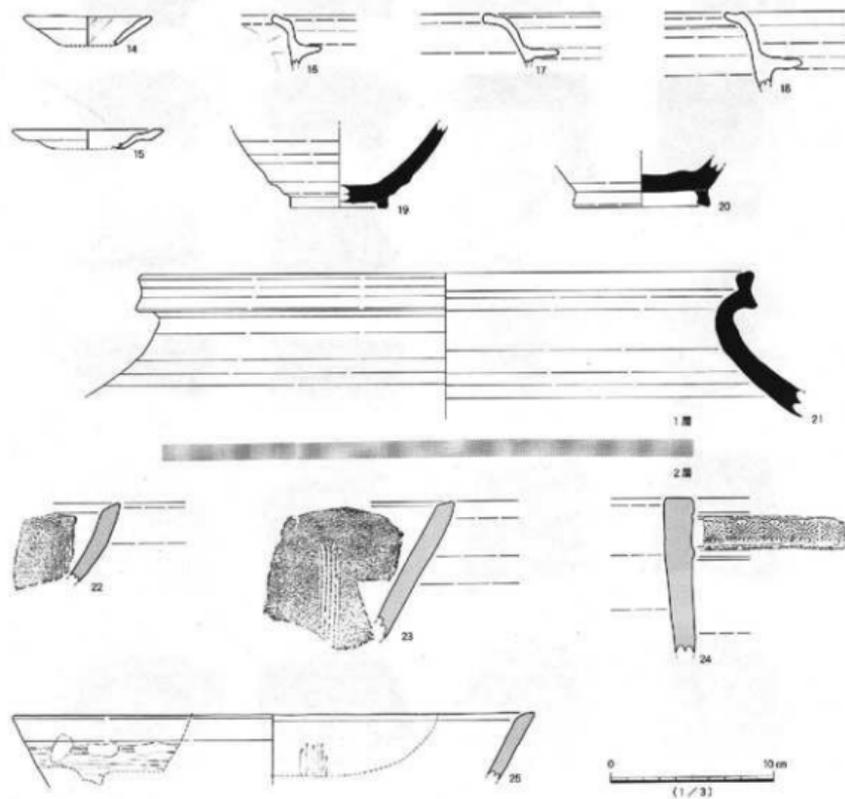


図43 SE-01出土遺物実測図② (上段: 1層、下段: 2層)

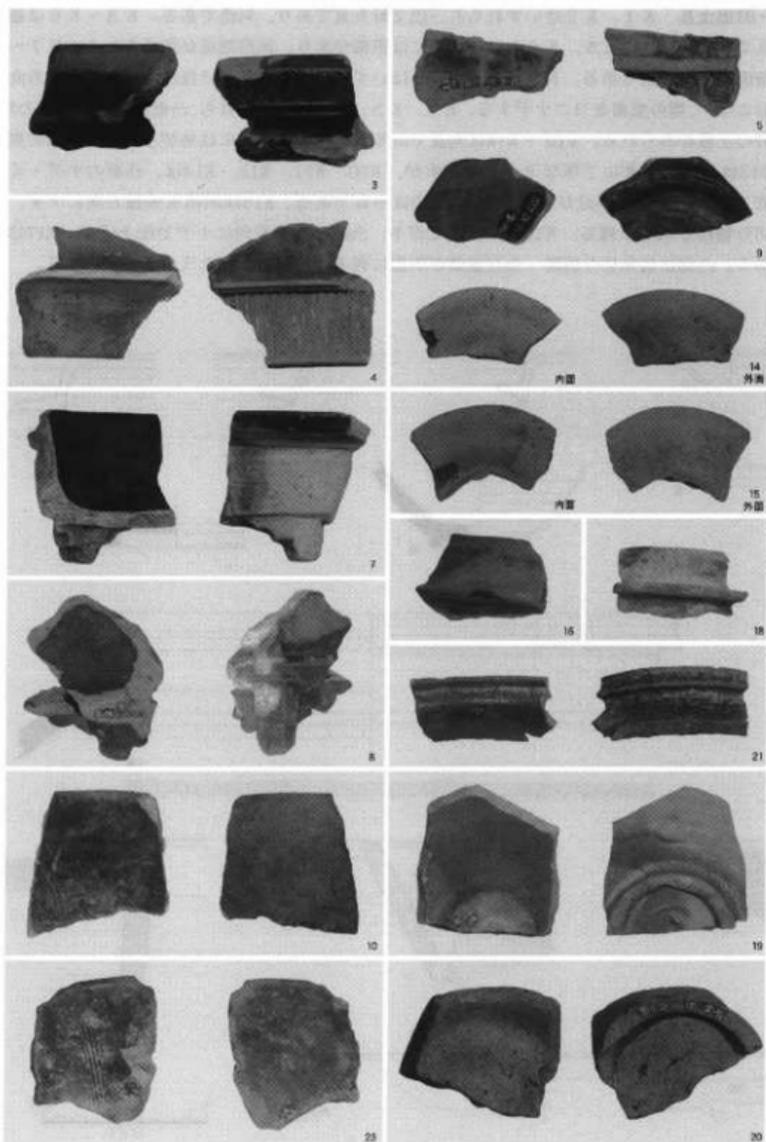


图44 SE-01出土遗物写真①

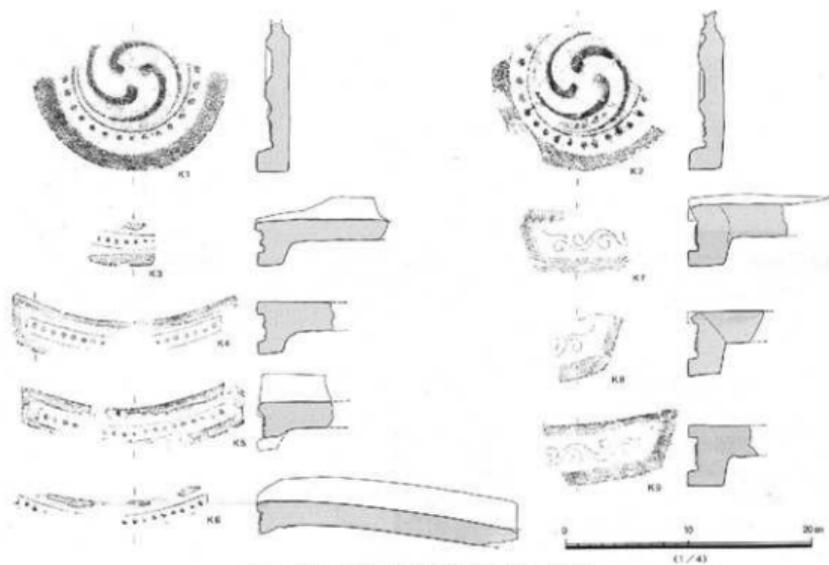


图45 SE-01出土遗物实测图③ (1層・軒瓦)

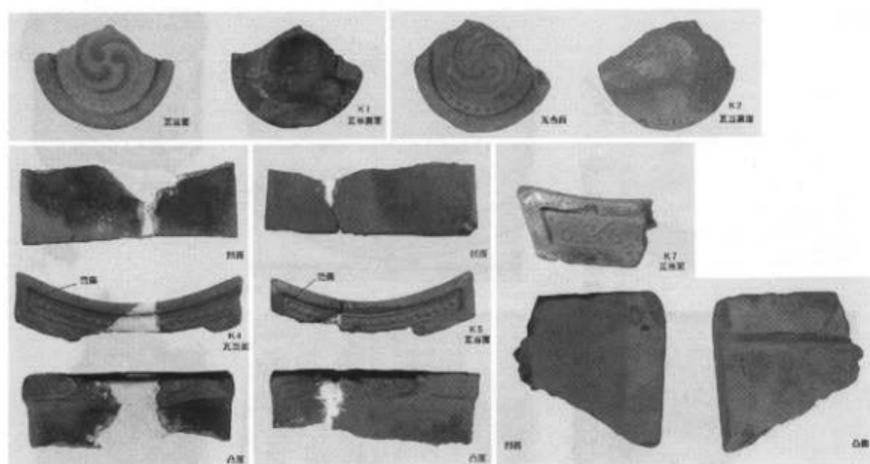


图46 SE-01出土遗物写真②

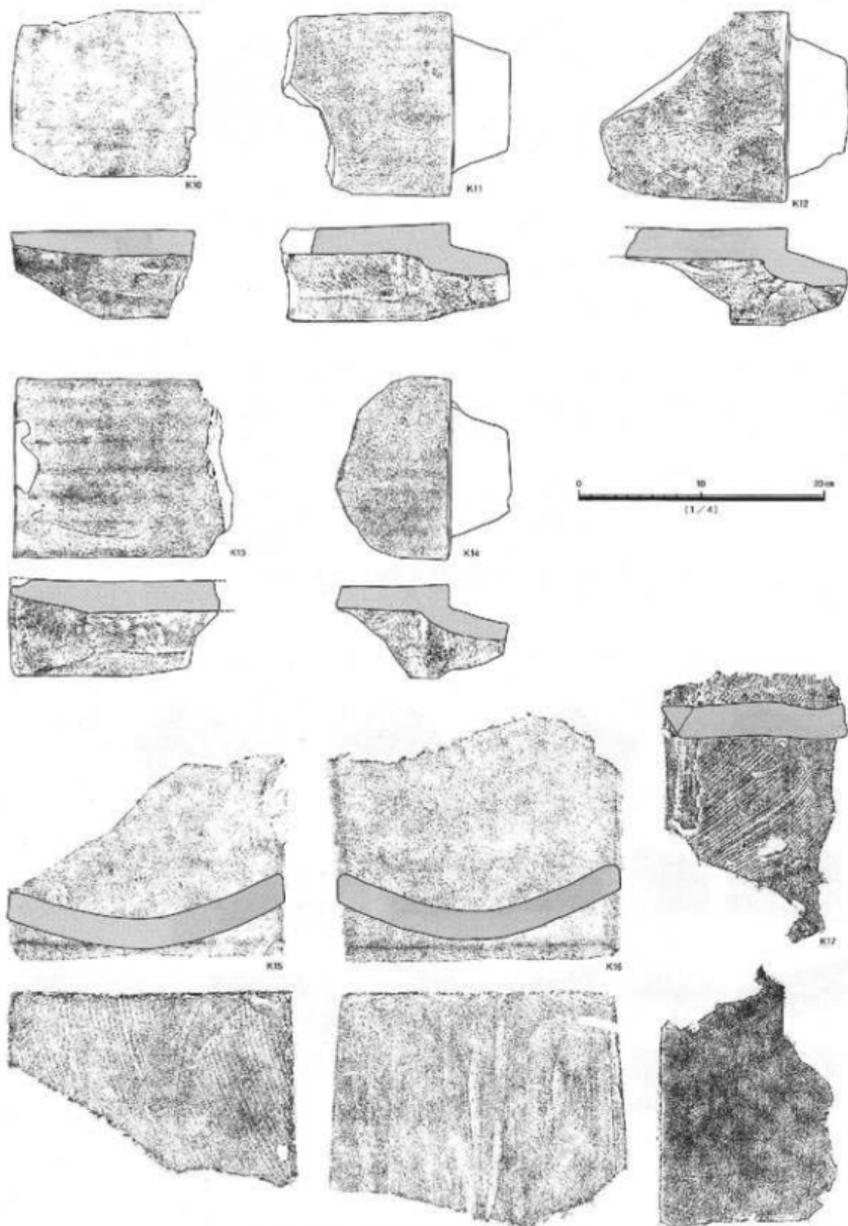


图47 SE-01出土遺物実測図④ (1層・瓦)

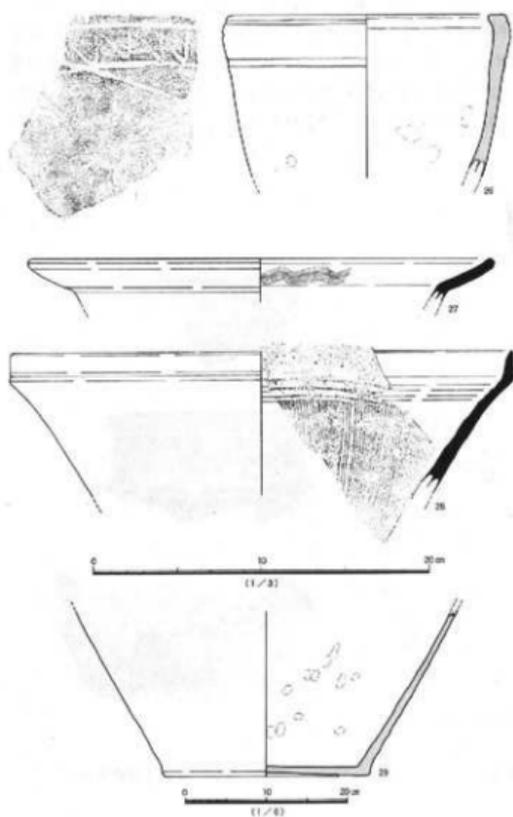


図48 埋裏-01出土遺物実測図

埋裏-01出土遺物 26は瓦質土器火鉢である。口縁部外面に2条の沈線を巡らし、その内部にヘラ描きの波状文を施す。還元はやや不良で、土師質である（大和の瓦質土器は、近世以降は焼成が土師質となる傾向がある）。27は肥前陶器皿である。白泥で刷毛目波状文を描き、後に緑釉を施すいわゆる二彩唐津である。28は信楽焼措鉢である。口縁部は内側に屈曲し外面には沈線を巡らせる。29の瓦質甕は埋裏の主体となっていたものである。やはり還元が不良で土師質となっている。内面は使用に伴うとみられる剥落が著しいが、付着物などはない。これらの遺物には、17世紀前葉の時期観が与えられよう。



図49 瓦質甕写真

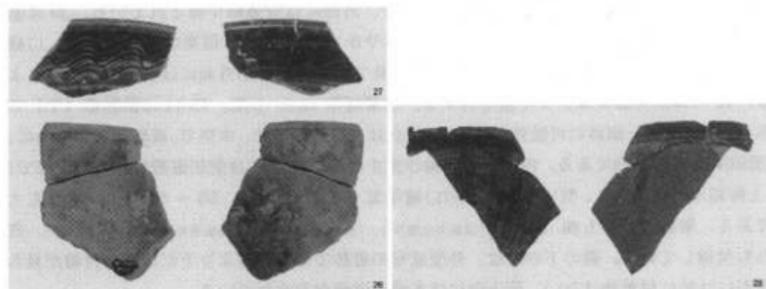


図50 埋裏-01出土遺物写真

埋裏-02出土遺物 22は肥前磁器染付碗である。口縁部外面に波状文を描く。いわゆる初期伊万里の範疇に収まる遺物である。31は土師器羽釜である。菅原分類(新出)の大和I₂型で、川口編年(川口宏海「16世紀における大和型土器の動向」『中近世土器の基礎研究』V,1996)ではⅢ-3型式に属する。32は埋裏の本体となっていた瓦質土器甕である。土師質化の傾向が顕著に見られる。内面は剥落が著しいが、付着物はない。底部には焼成後の穿孔が見られる。これらの遺物に関しては、17世紀前葉の時期観が与えられよう。

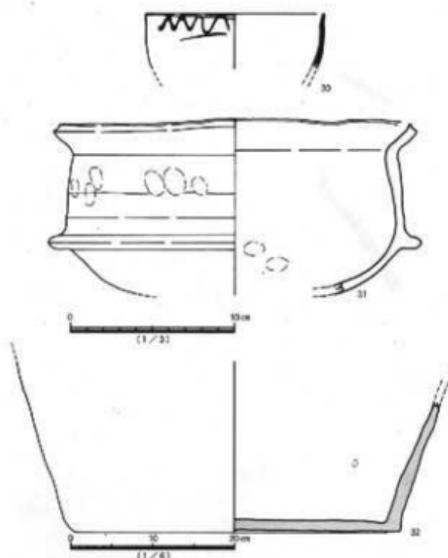


図51 埋裏-02出土遺物実測図

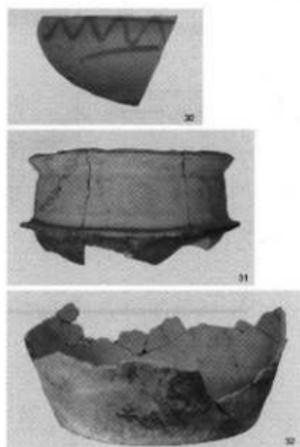


図52 埋裏-02出土遺物写真

S X-01 出土遺物 33は志野焼皿である。内面に鉄絵で草花を描く。34は肥前磁器染付碗である。外面には笹文が描かれる。35は肥前陶器碗である。灰軸が施されており、底部は丸巾となる。36は肥前磁器染付碗である。外面には梅枝文が描かれ、見込みには蛇の目軸刺ぎが見られる。37は瀬戸・美濃焼天目茶碗である。38は肥前磁器碗で、外面には青磁軸が施されている。39は肥前磁器染付碗である。薄手の製品で、貝須の発色も鮮やかである。40は信楽焼播鉢である。口縁端部は外に折り返し、面を作る。41, 42は瓦質土器播鉢である。口縁部外面には強いヨコナデにより面を作る。42の体部外面にはタキ痕を有する。佐藤編年(前出) E期。43, 44は動物形(牛)の土製品である。両者は同一個体の可能性が高いが、接合はできなかった。中空で、成形は手づくねによる。45は肥前陶器皿の底部である。内面には灰軸が施される。46, 47は肥前磁器染付碗の底部である。49は土師器羽釜(大和I₂型)である。川口編年Ⅲ-2型式(前出)。50~55は、いずれも土師器焙烙である。難波分類F b類(難波洋三「市販の土器作り」『京大大学構内遺跡調査研究年報1996年度』1996)。底部はいずれも欠損している。罫の下の段は、外型成形の痕跡である。罫より下には煤の付着が見られるが、内面には特に付着物はない。胎土中には多量の雲母が含まれている。

K18～24は、本遺構から出土した軒瓦である。軒丸瓦は左三巴文（K-18）、軒平瓦には楡（K20～24）、桐（K19）がある。これらの瓦の中には凸面に煤が付着したもの（K21など）が見られることから、これらが葺かれていた建物は火災にあった可能性がある。

本遺構出土遺物に関しては、16世紀後葉のもの（40～42、48.49）、17世紀前葉のもの（33、35.37.45）、18世紀前葉～中葉のもの（33.34.38.39.46.47.50～55）、19世紀以降（36）に大別できる。混入が著しいが、遺構本来の時期は18世紀と考えてよからう。

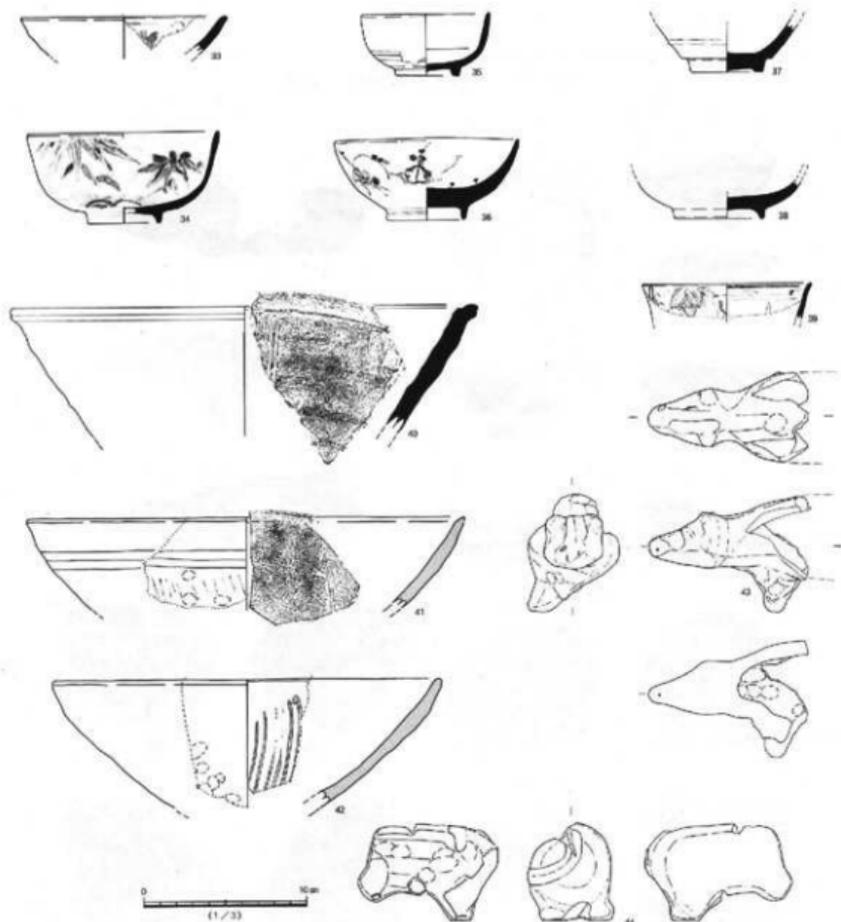


図53 SX-01出土遺物実測図①（1層）

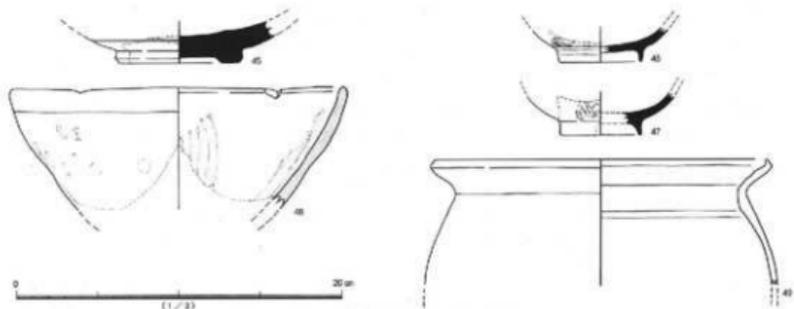


图54 SX-01出土遗物实测图② (2層)

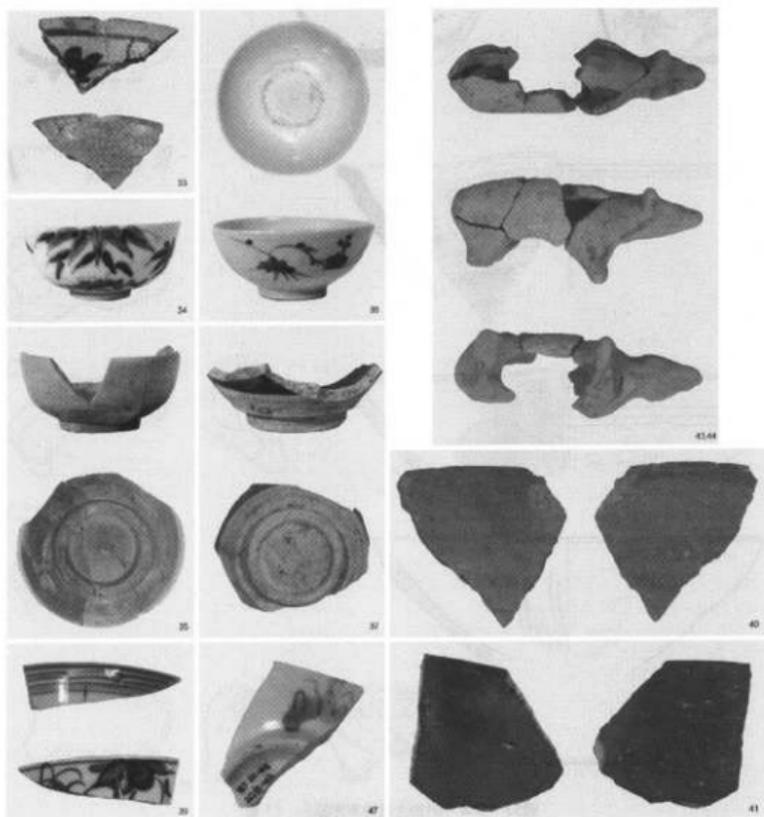
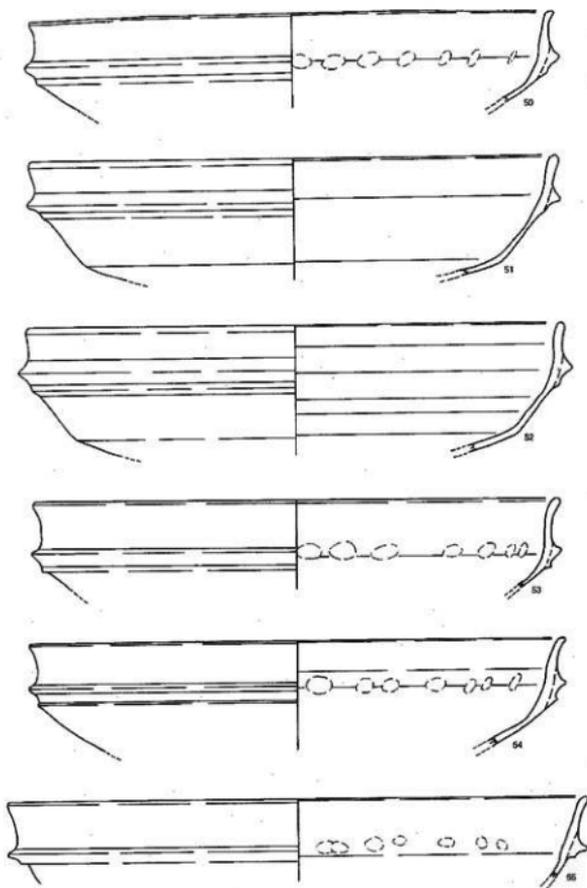


图55 SX-01出土遗物写真①



0 10 20 cm
(1/3)

图56 SX-01出土遗物实测图③ (1层)

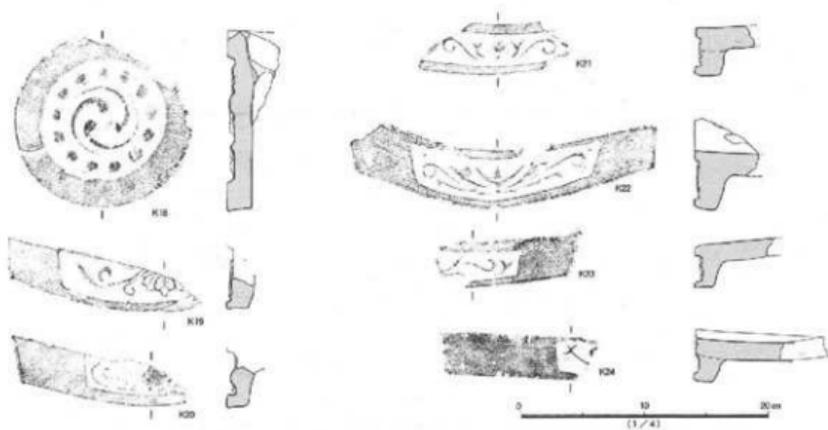


图57 SX-01出土遺物④(瓦)

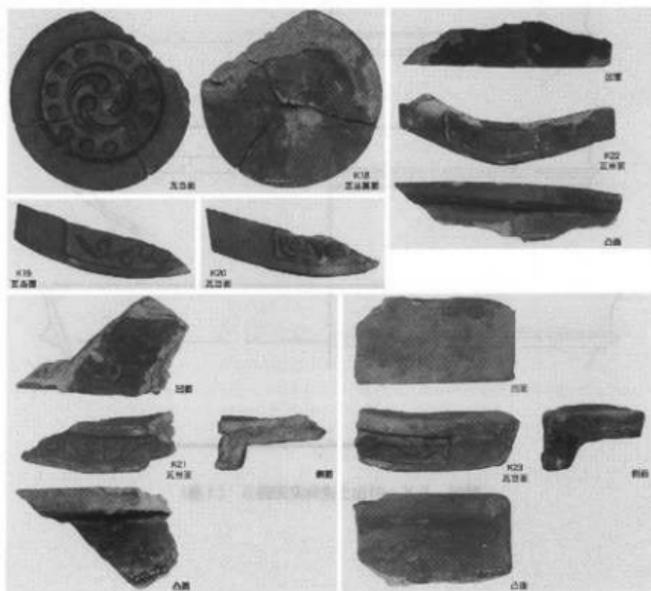


图58 SX-01出土遺物写真②

S X-02出土遺物 56は瓦質土器摺鉢である。口縁外周を強くヨコナデし、体部上半には板ナデを施している。佐藤編年E期(横山)(16世紀後葉)。

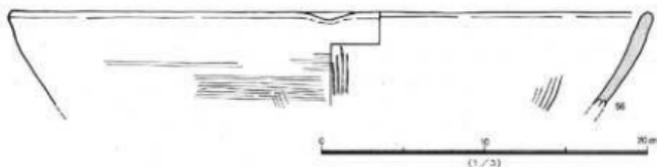


図59 S X-02出土遺物実測図

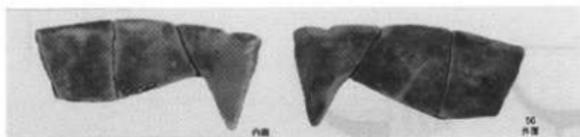


図60 S X-02出土遺物写真

S K-01出土遺物 57は鉄軸陶器裏の口縁部である。口縁端部を拡張し、面を作る。胎土中に長石粒を多く含む。信楽焼か?内面には黄褐色の付着物が見られる。幕末に近い時期のものと思われる。



図61 S K-01出土遺物写真

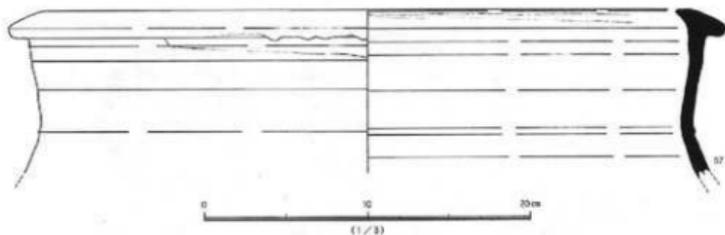


図62 S K-01出土遺物実測図

S K-02出土遺物 58.59は、肥前陶器碗である。共に灰軸が施されるが、59は銅軸に近い発色である。高台は露胎で、底部は兜巾となる。なお、58は破断面を意図的になめらかに打ち欠いており、泥メンコとして使用していたようである。いずれも16世紀前葉。

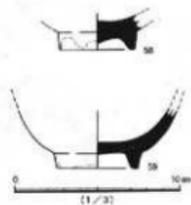


図63 S K-02出土遺物実測図



図64 S K-02出土遺物写真

SK-03 出土遺物 60は土師器皿である。内面は一周ナデ、外面はユビオサエ。灯明皿として使用されている。61は土師器皿である。全体に火を受けており、黒変している。62は肥前磁器碗で、外面に青磁釉を施す、いわゆる青磁染付である。見込みには菊花文、高台内には渦福が描かれる。63は肥前磁器染付碗である。外面には瓜？が描かれる。口縁内面には四方禰、見込みにはコンニャク印判による五弁花が押される。64は京・信楽系灰釉陶器碗である。高台内は小ぶりの兜巾底をなす。65は肥前磁器染付碗の口縁部。66は肥前磁器染付皿である。外面には唐草が描かれる。67は鉄釉陶器裏の口縁部である。外面には沈線を巡らし、口縁端部を拡張している。信楽焼か？

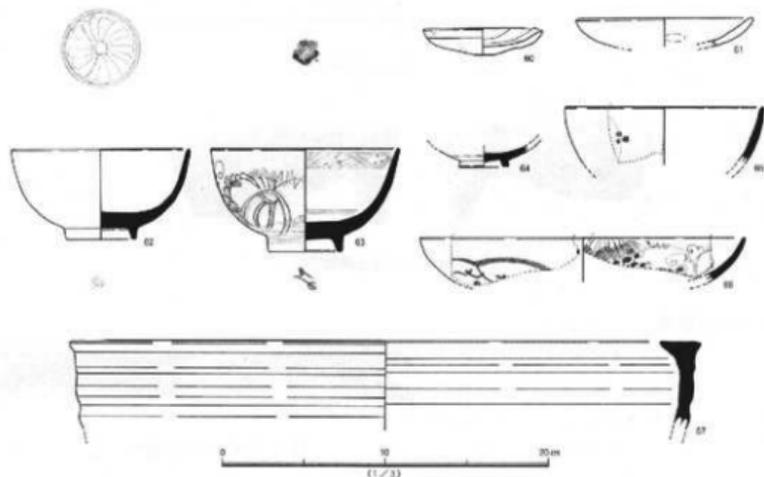


図65 SK-03出土遺物実測図

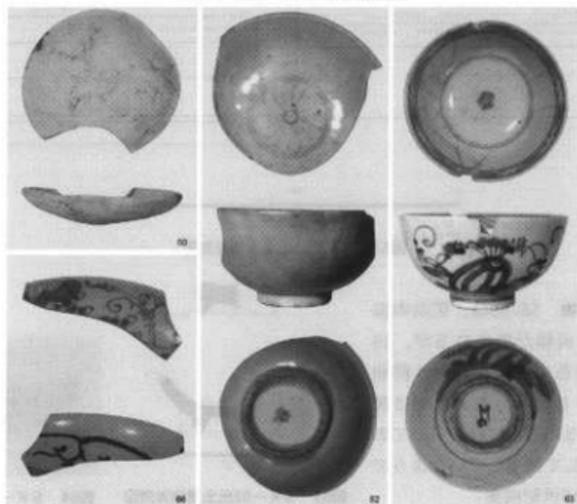


図66 SK-03出土遺物写真

S X-03出土遺物 68は陶器鉄釉甕の口縁部である。外面に沈線を巡らし、端部を拡張する。信楽焼か？69は肥前磁器染付小碗である。いわゆる紅猪口で、笹文が描かれているほか、ごく一部であるが赤絵具の痕跡がある（おそらく「小町紅」と書かれたもの）。70は京・信楽系陶器皿である。内面には鉄絵で山水文が描かれる。71は肥前磁器染付碗である。外面および見込みには斜格子文が描かれる。いずれも幕末に近いものであろう。

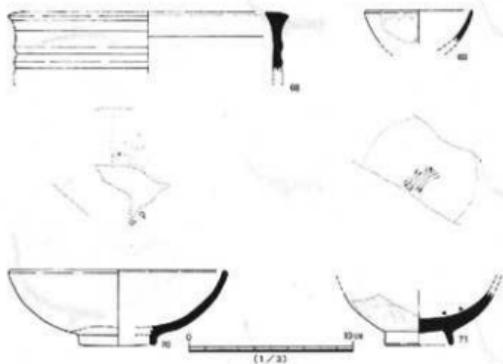


図67 S X-03出土遺物実測図

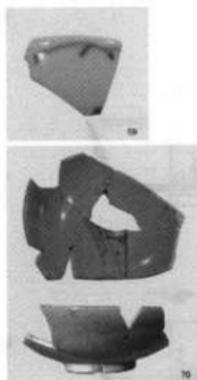


図68 S X-03出土遺物写真

S X-04 出土遺物

磁器 72は瀬戸の染付に後絵付している。外面の花弁文周辺には緑彩も施される。73～76. 83はいずれも瀬戸の端反碗で、染付で山水文を描く。77は肥前の斜格子文端反碗。79～81はいずれも瀬戸の小型端反碗。78は小碗の蓋である。扇状の区画内部に山水文が描かれる。瀬戸。82は花唐草文が描かれた瀬戸端反碗。84は肥前の丸文染付小碗である。薄手の精巧な造りとなっている。85.86は肥前の小皿である。見込み蛇の目軸剥ぎの部分には白濁したアルミナが塗布されている。87.88は肥前の丸碗である。87の外面にはコンニャク印判が押される。89は肥前の丸碗で、薄手の造りである。90.91は肥前の雪輪文蓋付碗である。見込みには源氏香文、口縁内部には四方禪文が描かれている。91は焼継ぎが施されており、高台内部に繕師のサインがある。92.93も同様に肥前蓋付碗である（両者はセットにはならない）。92の外面は鶴松文、93は山水文が描かれている。94は肥前の丸碗で、よろけ縞文を描く。図71は全て広東碗である。95は赤絵で花（？）が描かれる。肥前。96は染付で蝙蝠文を描く。肥前。97.98は非常に似たプロポーションを有する染付碗である。いずれも瀬戸。99は鳥（？）が描かれた染付碗。瀬戸。100は染付で樹木が描かれている。瀬戸。101は雨降り文が描かれた肥前の染付碗。102は振り文が描かれた瀬戸の染付碗である。色調はやや茶色味を帯びる。103は花（？）が描かれた染付碗。瀬戸。104は仙芝文が描かれた肥前の染付碗。105.106は菊花文が描かれた染付碗。いずれも肥前。107は笹格子文の肥前染付碗である。108は、植物が描かれた瀬戸の染付碗。109は、海浜の風景が描かれた染付碗。肥前か？110.111は丸文の間に図案を配するもので、111では鳥が描かれている。110は魚か？いずれも瀬戸。112と113は揃いで、水波紋の間に楓を配した染付碗である。いずれも瀬戸か？114は粗雑な花文を描く染付碗で、高台の歪みも大きい。瀬戸か？115.116は仙芝文を描く染付碗。瀬戸か？

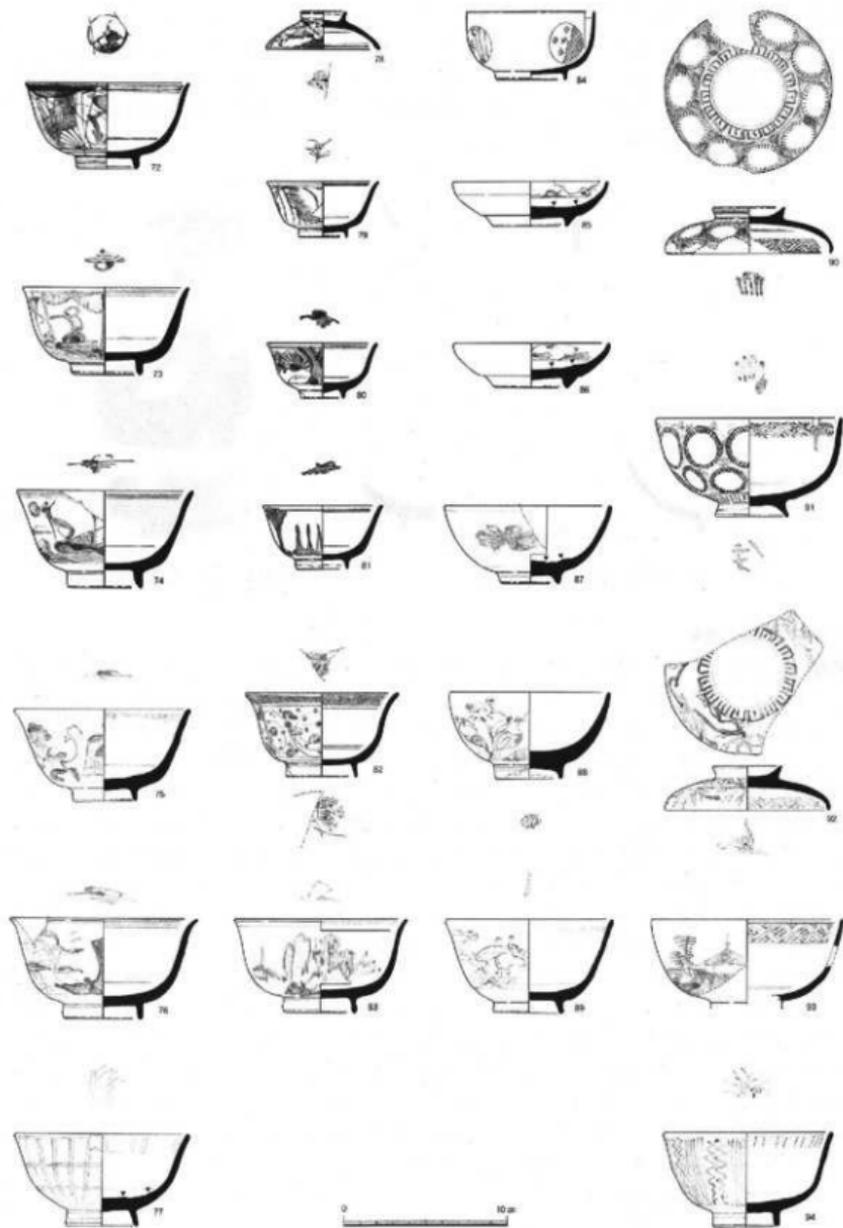


图69 SX-04出土遗物实测图①

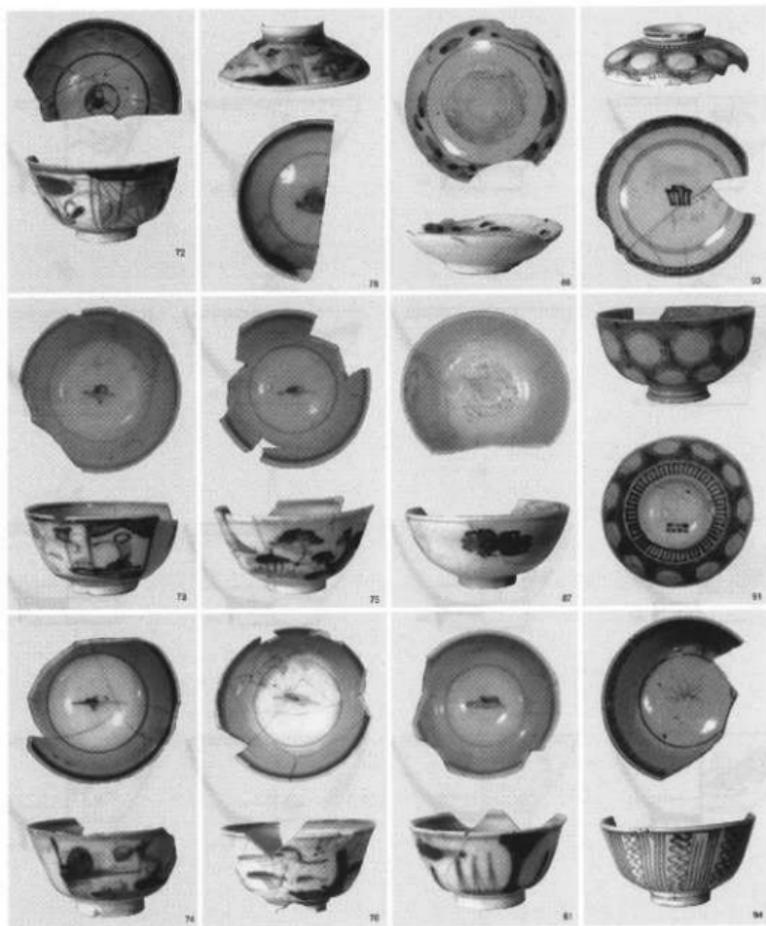


图70 SX-04出土遗物写真①

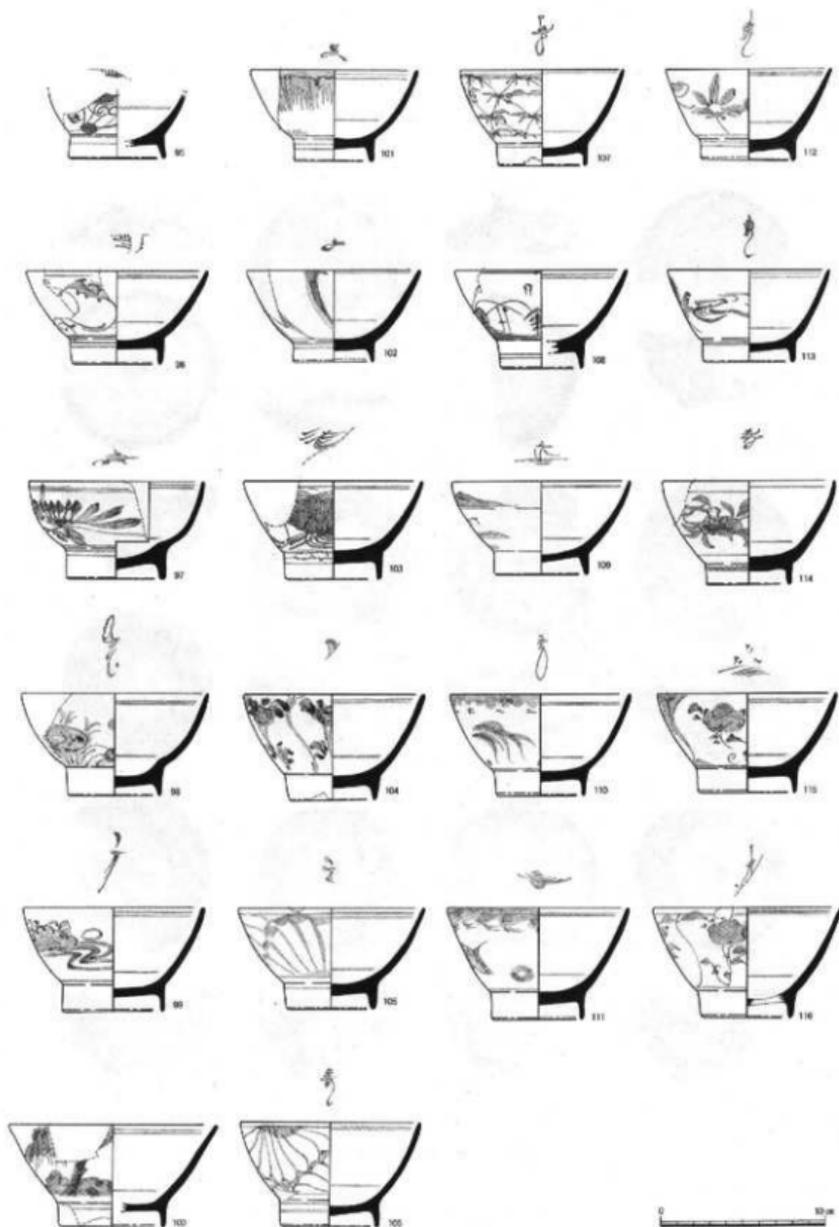


图71 SX-04出土器物实测图②

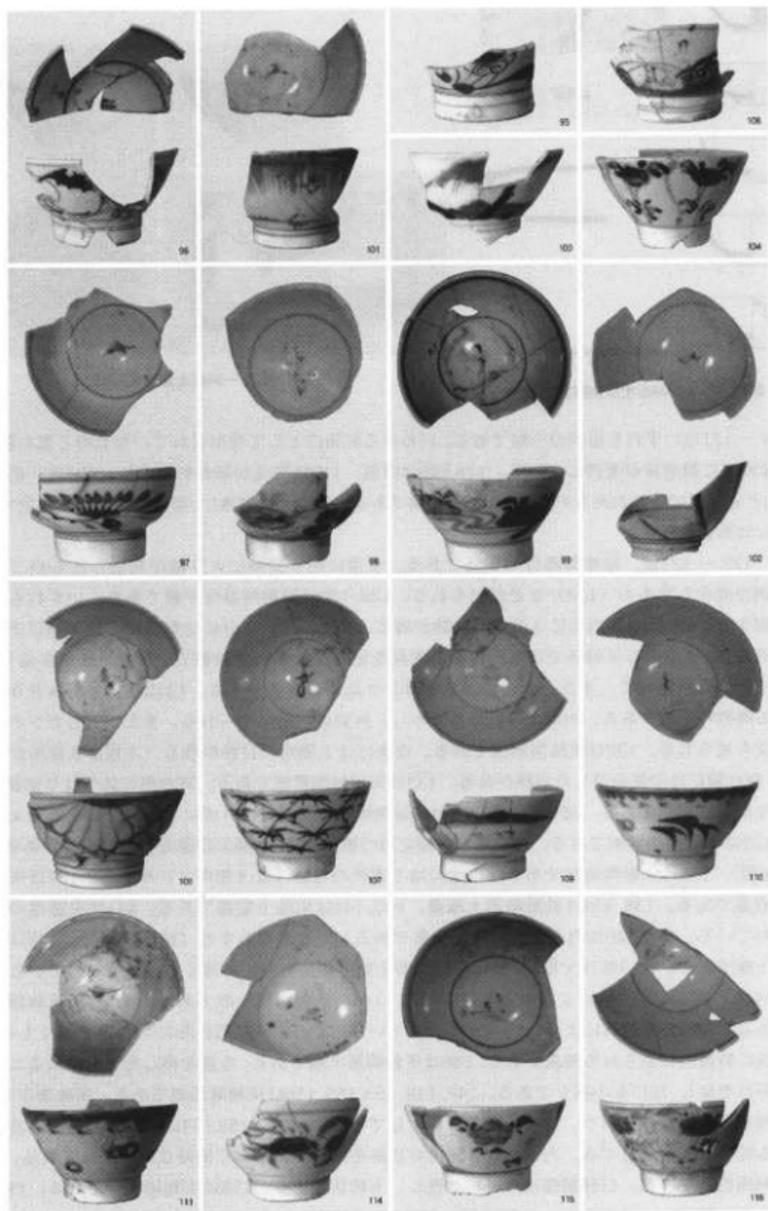


图72 SX-04出土遗物写真②

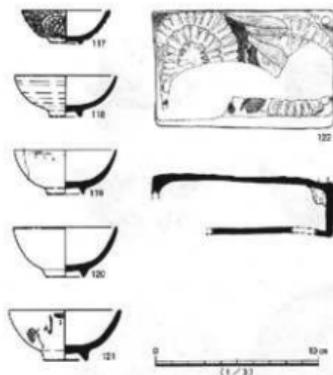


図73 S X-04出土遺物実測図③

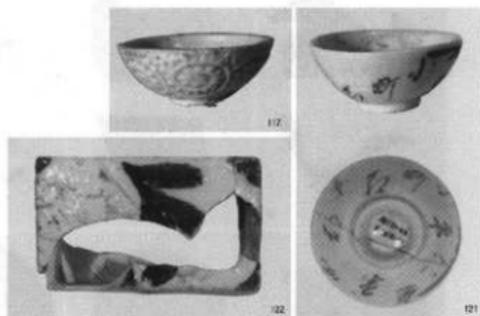


図74 S X-04出土遺物写真③

117～121はいずれも磁器の小碗である。いわゆる紅猪口として使用されていたものと思われる。117は外面に蛸唐草が型押しされる。118,120は白磁。119は笹文が描かれており、121は「京都小町紅」と赤絵具で書かれたもの。122は磁器水滴である。型造りの器体に、部分的に具須で彩色する。底部には布目を残す。

陶器 123～127は、緑釉陶器行平鍋蓋である。使用に伴う受熱により釉が発泡したもの(125)や色調が変化したもの(124)などが見られる。128,129は緑釉陶器行平鍋である。いずれも把手は欠損する。129は底部内面に3箇所の目跡が残る。また、片口部分には焼成時の付着物がそのまま残る。130は陶器行平鍋蓋である。内面に鉄釉を塗るが、外面は無釉で、泥漿で圏線を巡らし、イッチンで花枝を描く。また、外面にはトビガンナによる施文が入る。131は130と組み合うと思われる陶器行平鍋である。内面には鉄釉を塗布し、外面は泥漿が塗られる。また、トビガンナによる施文も見られる。132は鉄釉陶器皿である。内面には2箇所の目跡が残る(本来は3箇所か?)。また、高台脇には印銘を消した痕跡がある。133は天目軸陶器皿である。高台脇にはやはり印銘(丸印)を消した痕跡がある(図100参照)。134は緑釉陶器碗である。外面にイッチンによる施文を施す。135は銅緑釉陶器碗である。輪花形の口縁を持つ優品で、高台脇に印銘を消した痕跡がある(図100参照)。136は灰釉陶器皿である。内面には2箇所の目跡(計4箇所?)がある。137は灰釉陶器土瓶蓋である。138,139は鉄釉陶器土瓶蓋。140,141は灰釉土瓶蓋である。141は失透性の釉が施されている。また140は内面に3箇所の印銘を消去した痕跡を有する(図100参照)。142は灰釉陶器土瓶である。注口部は欠損。143は鉄釉陶器土瓶である。内面に薄く灰釉が塗られている。また、体部上半には藁灰釉による施文が見られる。144は灰釉陶器土瓶である。145は灰釉陶器土瓶蓋である。外面に鉄絵具により「大」字が描かれている。このように器表面に「大」字を描くものは、赤膚焼に特徴的に見られる要素である。146は灰釉陶器土瓶である。巾着を模したと思われるユニークな形状を呈し、注口も小振りである。147,148,153,155,156は灰釉陶器皿である。灰釉塗布の後、藁灰釉を重ね懸けしており、刷毛目状の装飾としている。149～152,154は灰釉陶器皿である。いずれも蛇ノ目高台を有する。内面には3箇所の目跡を持ち、鉄絵具で簡略な施文がなされる。157は灰釉陶器鉢である。口縁端部は外に折り返し、玉縁状とする。158は灰釉陶器鉢である。口縁端部は内面に肥厚し、面を作る。底部内面には粗い砂目が見られる。159は陶器火鉢である。

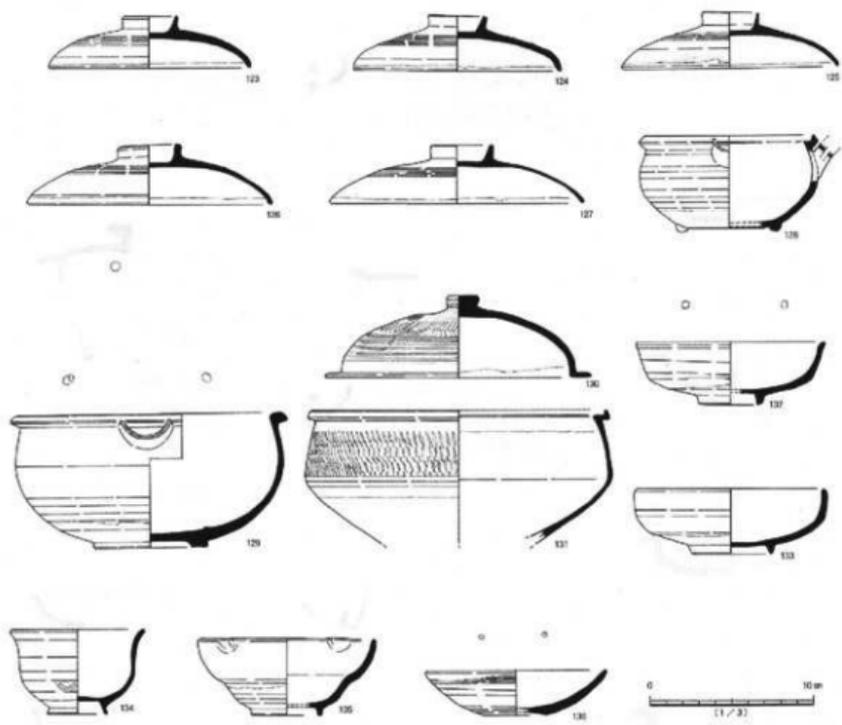


图75 SX-04出土遗物实测图④

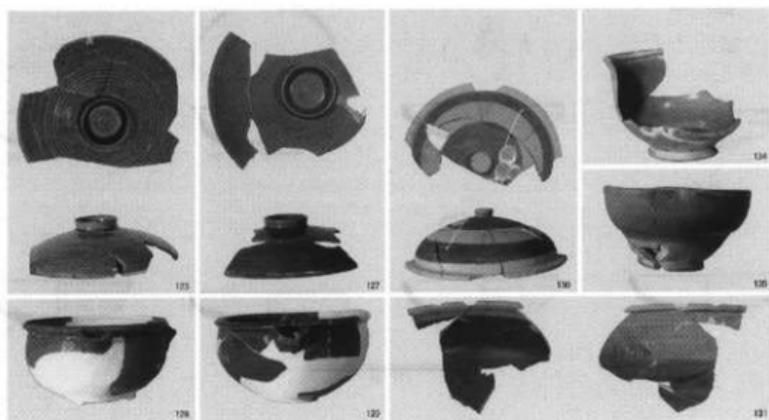


图76 SX-04出土遗物写真④

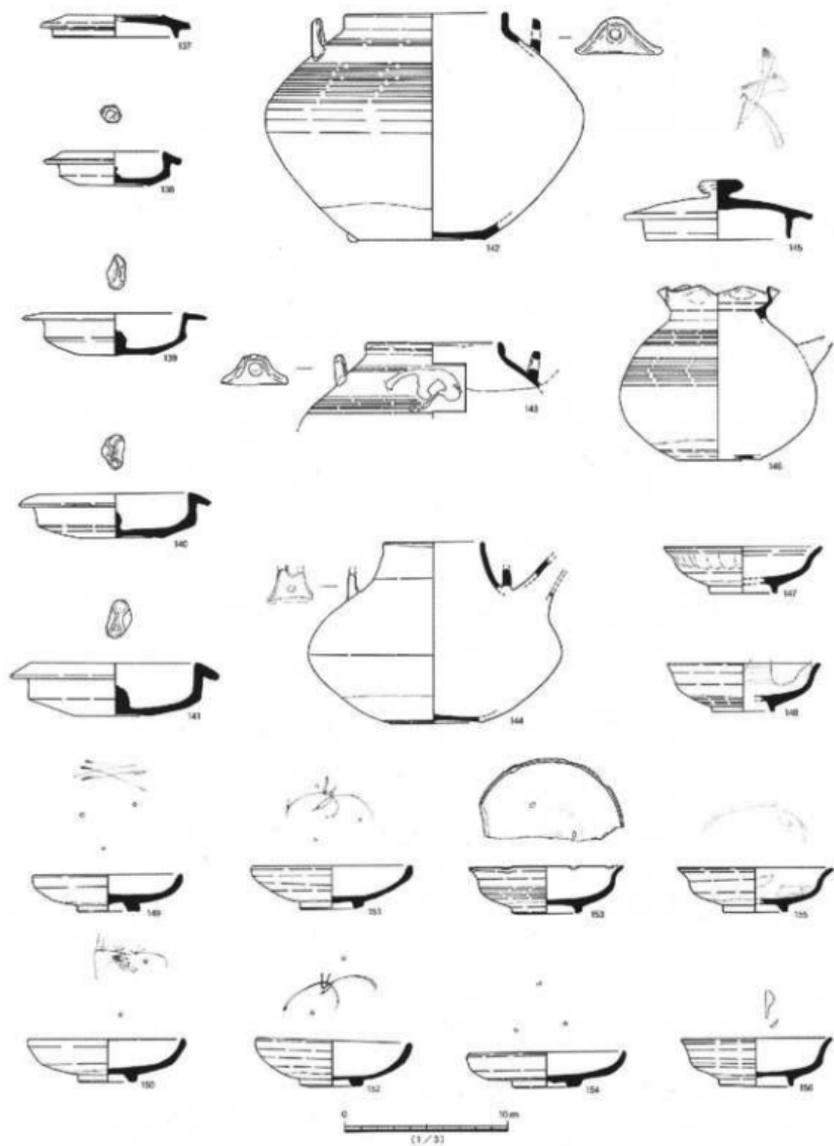


图77 SX-04出土物实测图⑨

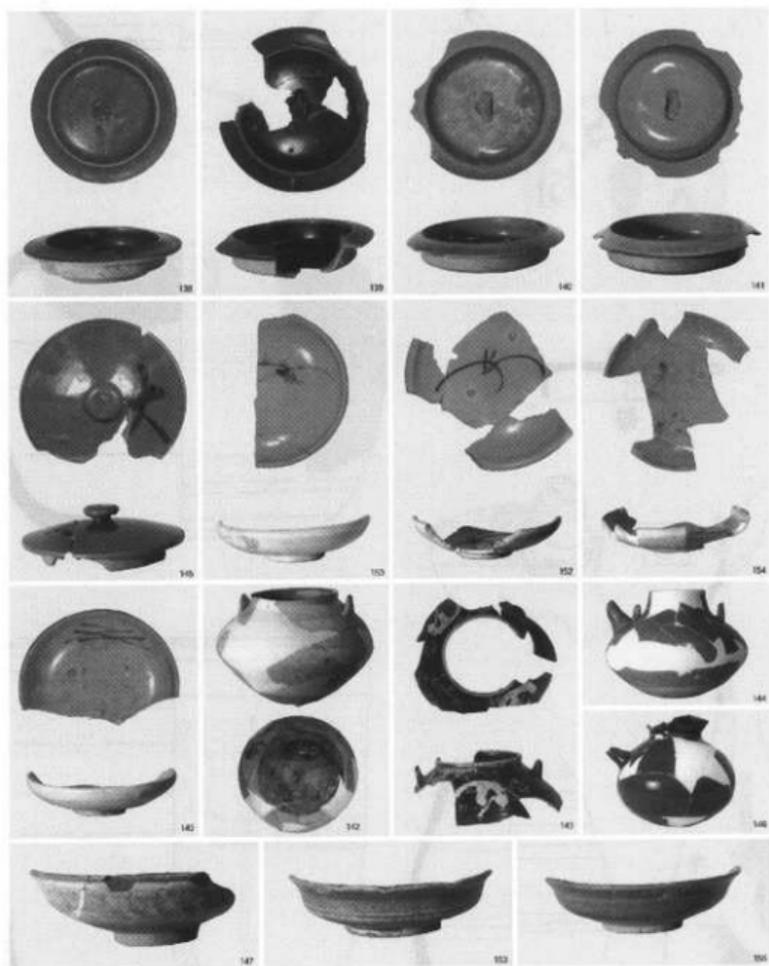


图78 SX-04出土遗物写真③

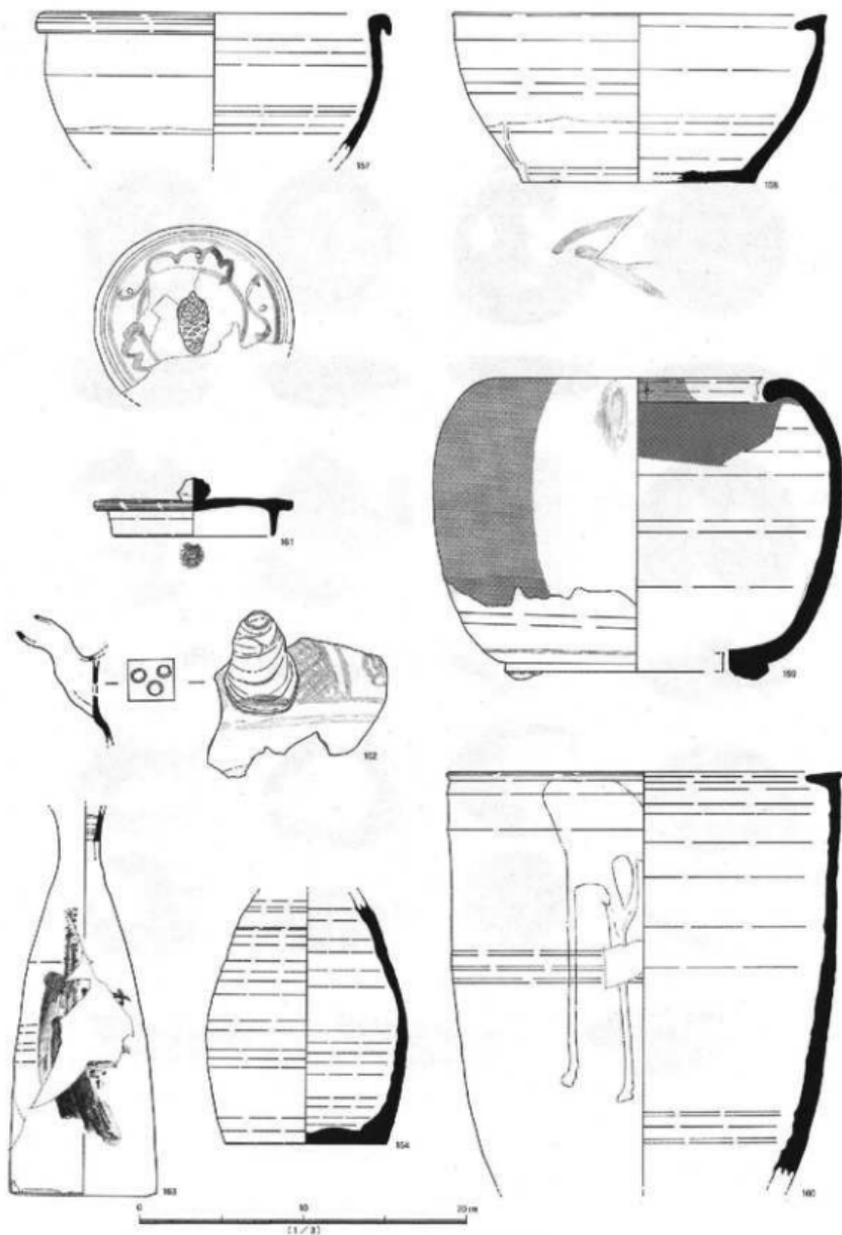


图 79 SX-04 出土遗物实测图⑥

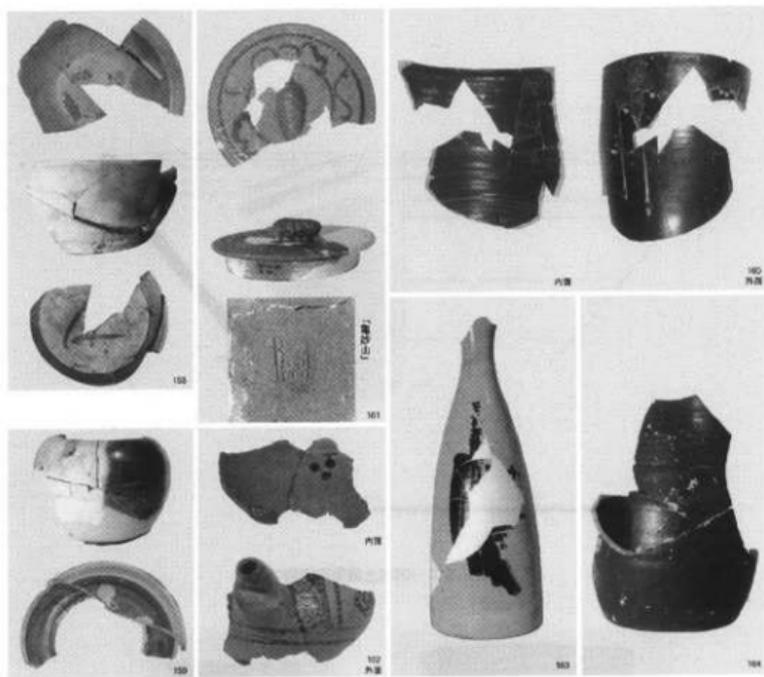


图80 SX-04出土遗物写真⑥

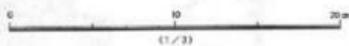
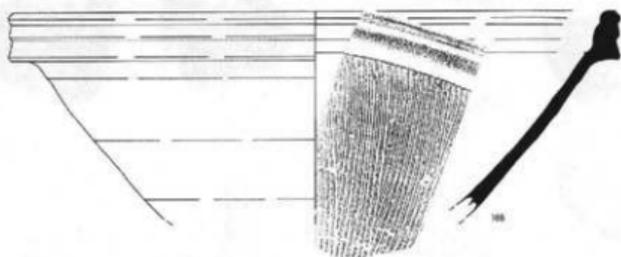
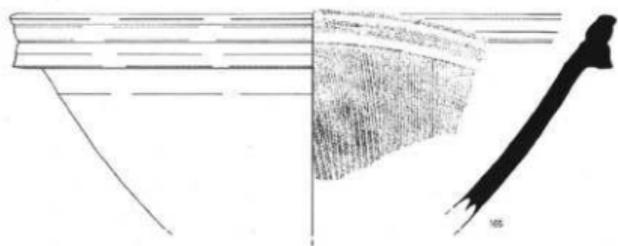


图81 SX-04出土遗物实测图⑦

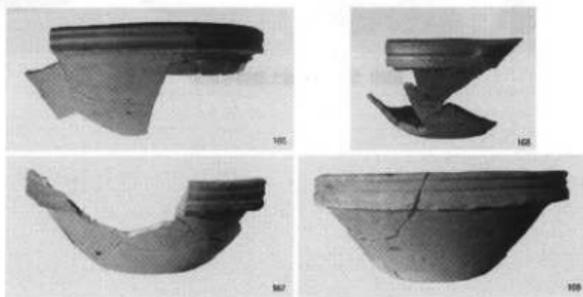


图82 SX-04出土遗物写真⑦

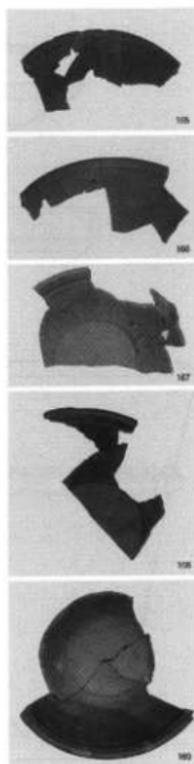
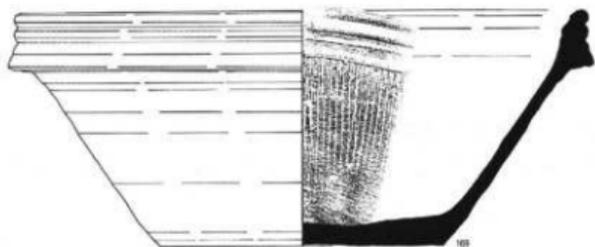
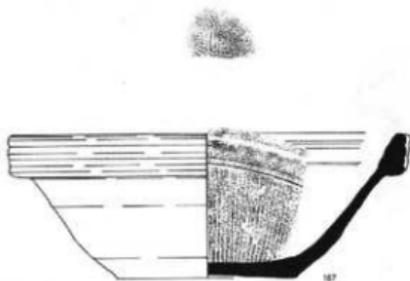


图83 S X-04出土物实测图⑧

图84 S X-04
出土遗物写真⑧

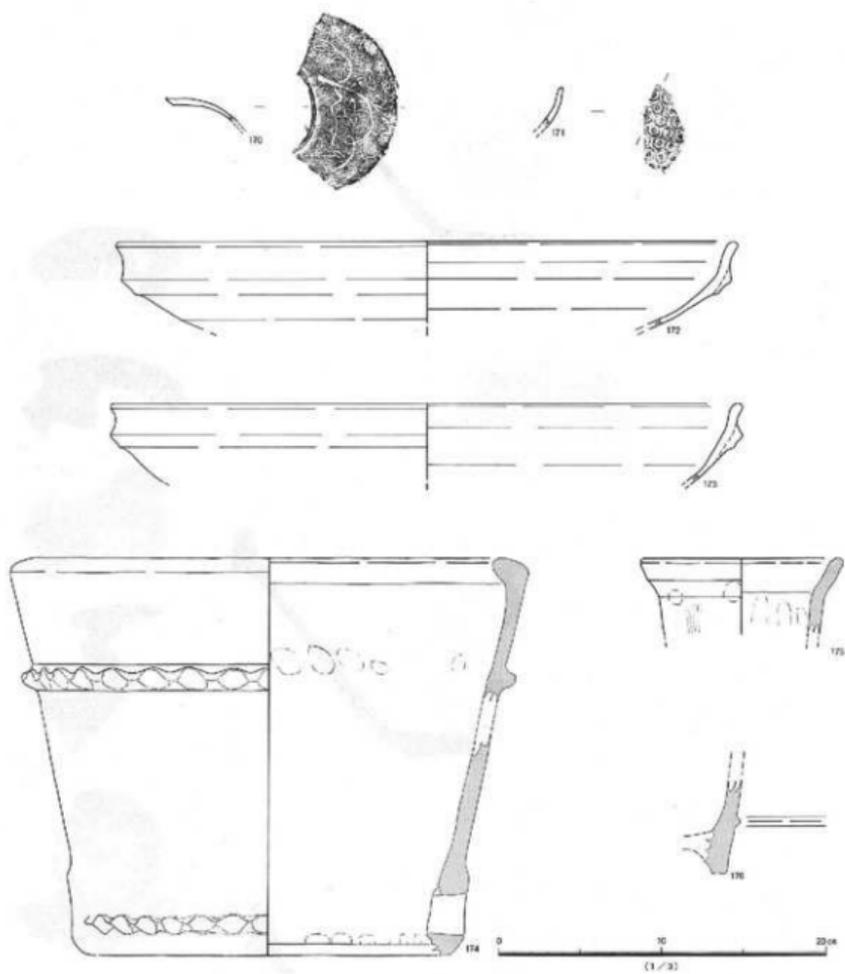


图85 SX-04出土器物实测图⑨

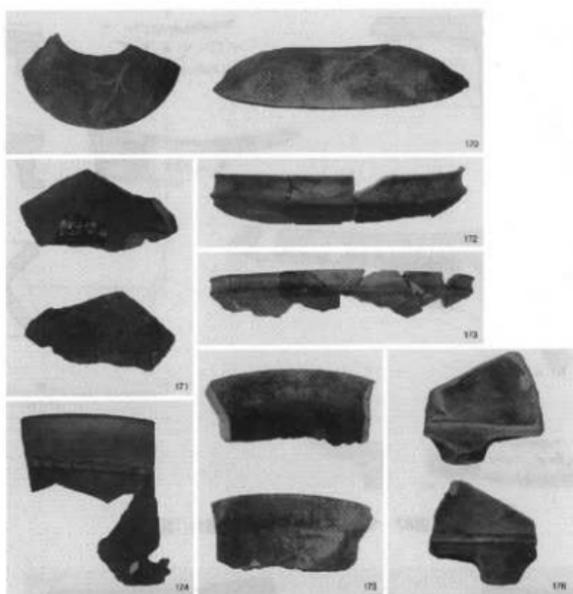


図86 SX-04出土遺物写真⑨

灰釉を施した後、薬灰釉・銅緑釉・呉須を流し掛けにする。また、内面や底部外面などの露胎部には泥漿が塗られている。160は鉄釉陶器鉢である。口縁端部は内側に肥厚し、面を作る。口縁直下には薬灰釉を流し掛けにする。161は陶器鉄絵土瓶蓋である。つまみを松球形（型作り）とし、唐津風の灰釉を施した上に鉄絵を描く。天井部内面中央には「亀妙山」の角印を有する。162は鉄絵陶器土瓶で、161と組み合うもの。器表面には鉄絵で鳳凰などが描かれている。京焼か？ 163は鉄絵陶器徳利である。灰釉を施した器体に山水？が描かれている。164は陶器徳利である。焼締の器表面に泥漿が塗られる。165～169はいずれも堺焼播鉢である。白神編年の堺焼播鉢Ⅲ型式（白神典之「堺播鉢考」『東洋陶磁』19,1992）。このうち167は小型の製品である。

土師器 170は土師質の製品で、器表面に印花文を巡らせ、その内にヘラ描きの植物（瓢箪？）を配したものである。成形は型押しによる。器種は不明である。171はやはり土師質の製品で、器表面には亀甲文を型押しにする。器種は不明。172、173は土師器焙烙である。難波分類（前出） F b類。胎土中には雲母を多量に含んでいる。174は瓦質土器桶である。木製の桶を模したものと思われ、体部上端と下端にそれぞれ竹製のものをまねた箍を廻す。底部付近に穿孔があり、ここに栓をして液体の保存容器として用いたものと思われる。175は瓦質土器土管である。外面は縦方向の板ナゲ調整。176は瓦質土器角形火鉢の脚部である。

瓦 K 25とK 26は左三巴文軒丸瓦である。両者は異范。K 27～K 29は、中心飾りに桶を置いた軒平瓦である。K 30は道具瓦の一種と思われる。三角冠瓦か？表面には煤が付着している。

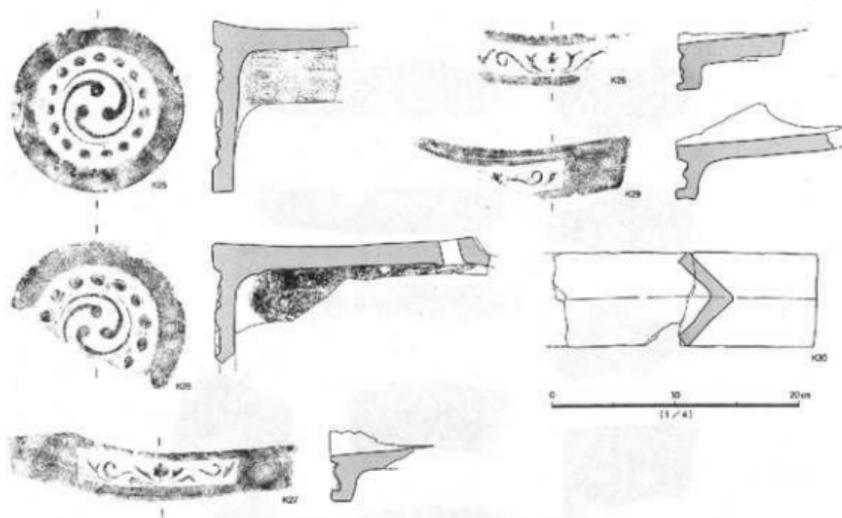


图87 SX-04出土遗物实测图⑨(瓦)

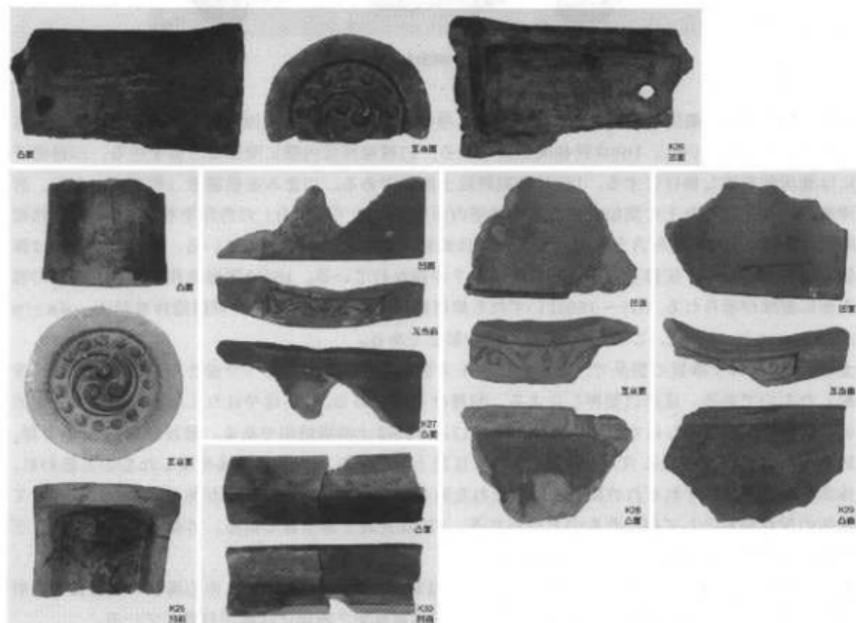


图88 SX-04出土遗物写真⑩

石垣-01 西側堆積層出土遺物 177は鉄釉陶器甕?の口縁部である。外面には沈線を巡らせる。178は磁器染付碗である。花唐草文を鮮やかな兵須で描く。瀬戸。179は磁器染付碗である。外面には桐のコンニャク印判が押されている。肥前。いずれも幕末に近い時期の遺物であろう。

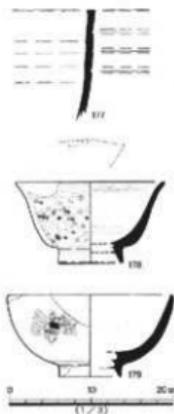


図89 石垣-01西側堆積層出土遺物実測図

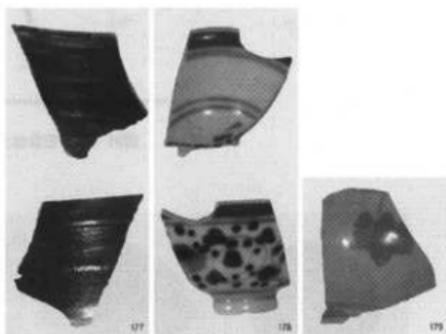


図90 石垣-01西側堆積層出土遺物写真

(2)第2トレンチ出土遺物

第3包含層出土遺物 180は、土師器焙烙である。難波分類(前西)F b類に属する。胎土中には多量のクサリ礫と雲母を含んでいる。181は土師器皿である。灯明皿として使用されており、口縁部の一部に煤が付着している。胎土中には雲母を多く含む。182は土師器皿である。胎土はなめらかで、雲母は含まれていない。183は磁器染付碗の口縁部である。外面には草花文、内面には山形文が描かれている。朝顔形の碗の破片と思われる。184は瓦質土器火消壺である。ロクロ成形で、外面は単位の太いミガキが施されている。胎土中には雲母を多く含む。これらの遺物については、18世紀後葉の年代観が与えられよう。

第2包含層出土遺物 185は磁器染付碗(朝顔形)である。186、187は磁器染付碗(丸碗)。いずれも内面は素文で、187では蛇の目軸割が見られる。188は土師器皿である。赤褐色を呈し、胎土中には雲母を多く含む。189は、鉄釉陶器土瓶蓋である。190は、灰釉陶器皿である。内面に白泥による文様が描かれている。191は、磁器染付皿である。内面には墨弾きの技法が使われている。192、193は、陶器行平鍋である。内面には灰釉が施されている。外面はトビガンナによる装飾のほか、泥漿による圏線やイッチン描きが見られる。また、把手には「ハイ」の商標が型押しされている。194は土師器焙烙である。難波分類(前西)F b類。胎土中には雲母を多く含んでいる。これらの遺物の時期は、18世紀末～19世紀初頭と考えられる。

出土銭貨 C1は寛永通寶で、いわゆる新寛永(1697年以降)である。C2は腐食のため銭種不明。C3も新寛永であるが、周囲を研磨されている。

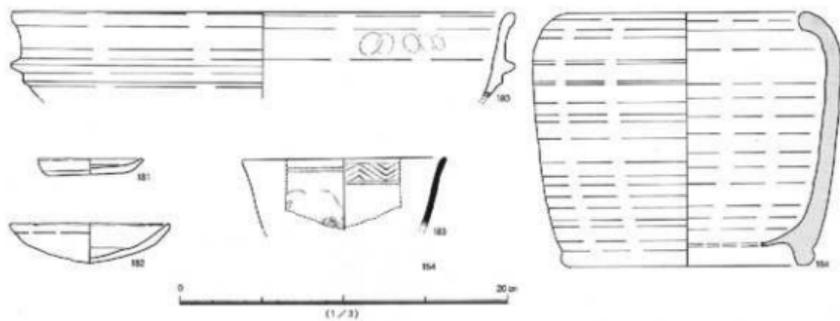


图91 第3包含出土物实测图

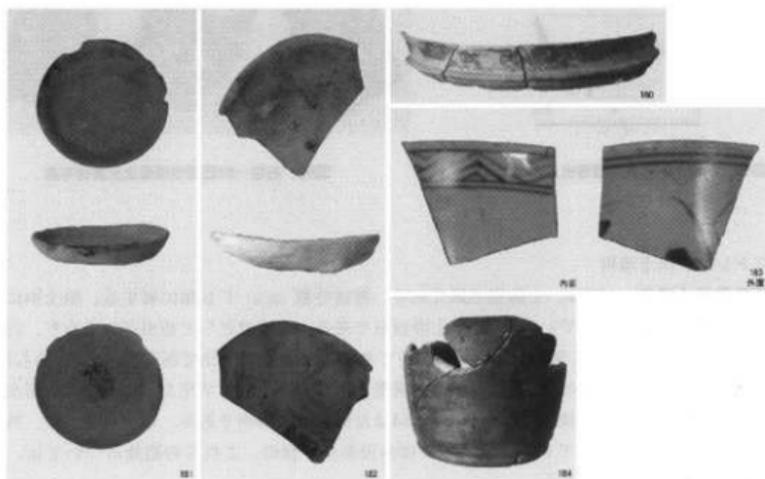


图92 第3包含层出土物写真

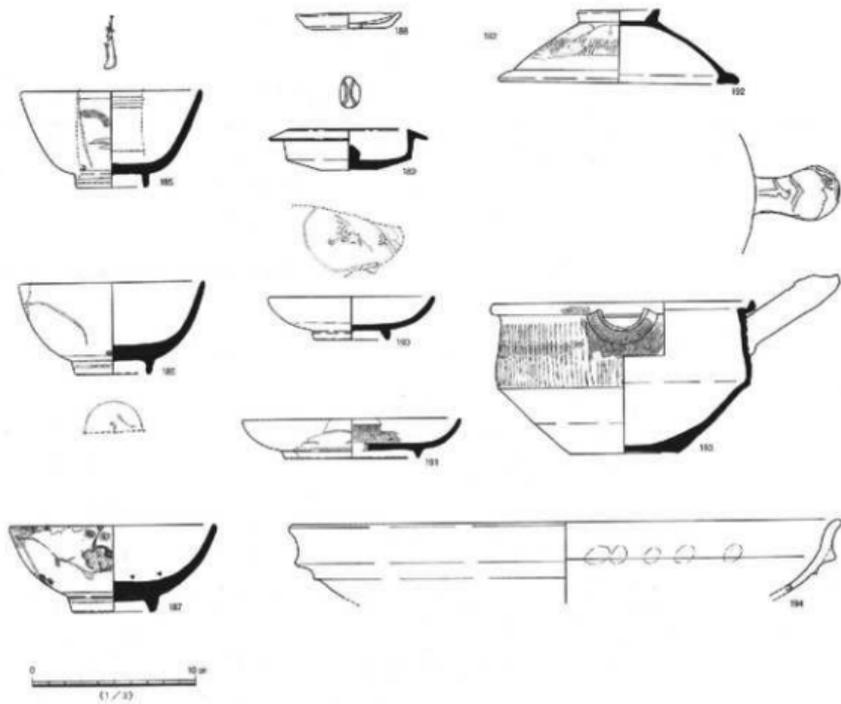


图93 第2包含层出土遗物实测图

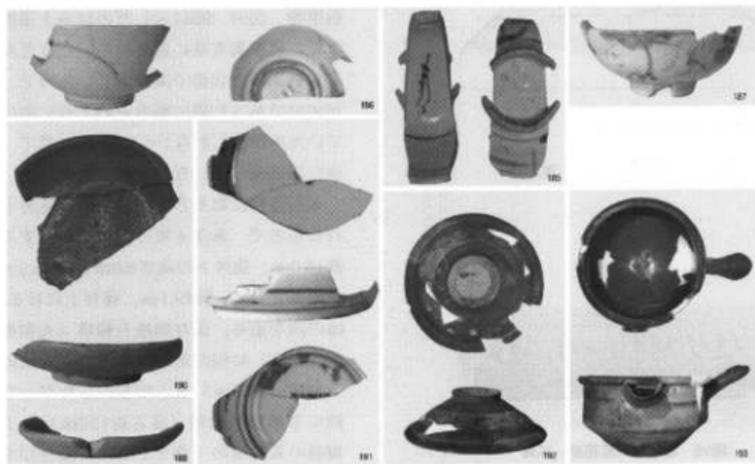


图94 第2包含层出土遗物写真

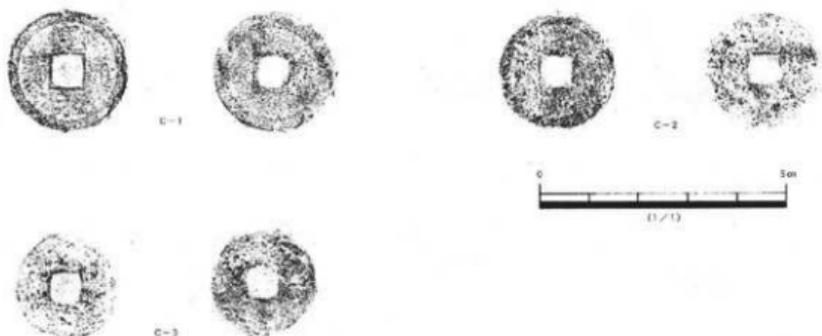


図95 出土銭貨拓影

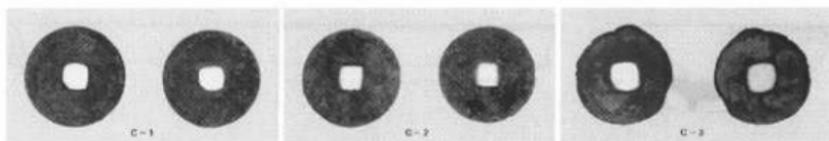


図96 出土銭貨写真

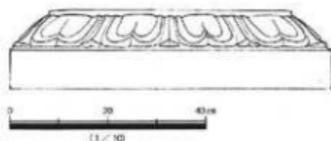


図97 石造物(反花座)実測図



図98 石造物(反花座)写真

石造物 図97、98に示したのは出土遺物ではなく、発掘調査地に置かれていた反花座である。裏返った状態で置かれていたので、ここが宅地であった際に踏み石のように用いられていたのかもしれない。状況的に見て、当然原位置は保っていないものと思われる。

本石造物はおそらく五輪塔の反花座と思われるもので、各面4枚の蓮弁を刻出する。総高16.0cm、蓮弁下の高さ8.0cm、幅65.2cm。蓮弁の高さ7.0cm、幅49.1cm。蓮弁上には高さ1.0cmの段を造る。筒井順慶五輪塔(大和郡山市长安寺町)に似た形態であるが、寸法的にはその幅(54.5cm)を上回る。したがって高さ的にも順慶五輪塔(高さ約152cm)を上回る規模の五輪塔の一部であった可能性がある。

IV まとめ

(1)遺構

今回検出された遺構から、次の点が明らかになった。

まず中世の状況としては、14世紀末には土地利用が始まっていたことが判明した。この時期の遺構には井戸（S E-01）と大型の土坑（S X-02）がある。このうちS E-01からは瓦が相当量出土していることから、この時期に調査地周辺には寺院が存在したと思われる。しかし、15世紀前葉にこの井戸は大量の瓦を廃棄する形で人為的に埋められていることから、この頃に寺院が廃絶した可能性が指摘できる。その明確な理由は不明であるが、永享6年（1434）、「筒井館」が越智氏に攻められている（『大乗院日記目録』）。あるいはこうした争乱が寺院廃絶の原因になった可能性もあるだろう。なお、残念ながら中世にさかのぼる時期の筒井城外堀を調査することはできなかったが、その基本的な遺存地割りが近代まで石垣などとなって残っていたことも確認できた。

15世紀前葉以降、この地にはしばらく遺構が途絶えるが、16世紀後葉に至って若干の土地利用がなされるようである（S X-02など）。しかし、本格的に屋敷地としての土地利用が開始されるのは近世に入ってからのことであった（埋雲-01・02など）。その後は継続的に屋敷地としての利用がなされたようであり、遺構も継続して存在する。主屋などの復元は今回の調査ではなし得なかったものの、18世紀以降は瓦葺の蔵（S X-01）なども存在したようであり、経済的には比較的恵まれた階層が居住したものと推定される。



図99 調査地周辺の空中写真（昭和38年、S：1/1,500）

(2) 遺物

今回の調査における出土遺物は、遺構を伴うものとしては14世紀から19世紀に及ぶ。また、様々な種類の土器・陶磁器類が出土しているが、圧巻はやはりSX-04出土の陶磁器であろう。幕末期の一括資料であるこれらは、当時の食器組成等を知る上で重要な遺物群である。この中に、やや特異な資料が見られたので、ここで紹介しておきたい。対象となるのは、いずれも陶器である。

132は鉄釉が施された平碗で、高台脇に印銘(丸印)を消された痕跡がある。また133は天目釉の平碗であるが、やはり高台脇に丸印を消した痕跡がある。さらに135は輪花形口縁を有する銅緑釉碗の優品であるが、これも高台脇に細長い印銘をスリ消した痕跡がある。こうした茶器類のほか、140は灰軸土瓶蓋であるが、底部には印銘をスリ消し、その上に粘土板を貼付けているように見受けられる。もっとも、印銘が3箇所離れた位置に入れられる例は伝世品にもほとんど例を見ないので、これは何か別の痕跡である可能性も残る。このほか、図77-147、148、155、156は緑釉ベースに白泥による装飾を施した小皿であるが、これらの中にも、やや確認しづらいものの、細長い印銘をスリ消した痕跡を有するものがある。

上述の遺物に関しては、すべて近世大和を代表する焼物である「赤膚焼」の製品と思われるもので、具体的には丸印(133など)は「木白」という赤膚焼のブランド名、細長い印(135など)は「赤ハタ」と瓢箪の中書かれた、いわゆる「瓢印」と考えられる。また、赤膚焼の小皿に関しては、近年近畿を中心に出土例がいくつか報告されており、いずれも高台脇に「赤ハタ」の瓢印がある。本遺跡出土の陶器小皿については、やや口縁部の形状などが異なるものの、施釉方法や口径・器高などはそれら出土例にほぼ一致することから、これらは赤膚焼のいわゆる「下手物」として市場に出回った品と判断できる。

しかし本遺跡出土の赤膚焼の場合、印銘がスリ消されていることが顕著な特徴となっている。その理由については不明だが、おそらくそれらはB級品であり製品乾燥の段階で印銘を消されてから焼成され、ノーブランドの品として市場に出回ったものではなかろうか。今後の類例の増加を待ちたい(詳細は山川尚「南州赤膚焼」『陶磁器の社会史』桂書房、2006 参照)。

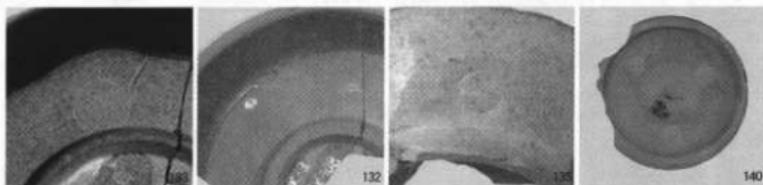


図100 消された印銘

No	出土遺物等	器種名	計測値 (cm)	色調	発祥地	備考
1		瓦質土器風伊		灰N4/		外面に花菱スタンプ文
2		瓦質土器角形火鉢		灰白5Y8/1		外面に菊花スタンプ文
3		瓦質土器風伊		灰N4/		外面に花菱スタンプ文
4		瓦質土器風伊		灰N5/		
5		瓦質土器火鉢		(伊)灰白2.5Y7/1(内)灰白・黄緑10YR7/2		外面に七宝スタンプ文
6		瓦質土器花瓶?		灰N5/1		
7		瓦質土器角形火鉢		(伊)灰N4/内)灰白N8/		
8		瓦質土器角形火鉢		灰N4/		
9		瓦陶筒	直径6.4	灰N4/		復入
10		瓦質土器鉢鉢		(伊)灰N5/ (内)灰N6/		B期
11	SE-01 1層	瓦質土器鉢鉢		灰N5/1		径目4条/単位
12		瓦質土器鉢鉢	径目30.0	(伊)灰N6/内)灰白N8/		B期
13		瓦質土器鉢鉢	径目31.0	灰N4/		径目5条/単位 B期
14		土師器皿	径目7.8	浅黄緑10YR8/4		20
15		土師器皿	径目9.2	浅黄緑10YR8/4		20
16		土師器羽釜		橙5YR7/5		大和H2型
17		土師器羽釜		橙5YR7/5		大和H2型
18		土師器羽釜		灰白10YR8/2		人和H2型
19		陶器平鉢	径5.9	(伊)灰白2.5Y7/1(内)灰白7.5YR7/2※輪色		古瀬戸後1期
20		須恵器	径底8.4	灰白10YR7/1		東海系、虫紋部?
21		常滑焼菓	径目137.6	(伊)灰オリーブ5Y5/3(内)黄灰5Y8/4/1		6a型式
22		瓦質土器鉢鉢		灰N5/		
23	SE-01 2層	瓦質土器鉢鉢		灰N5/		
24		瓦質土器鉢鉢		新黄緑5YR7/2		
25		瓦質土器火鉢		灰N4/		外面に七宝スタンプ文
26		瓦質土器火鉢		浅黄緑7.5YR8/6		15 外周へう蓋山形文
27	埴裏-01	陶器皿		内面に灰白・橙5YR7/3		5 二形唐津
28		陶器鉢鉢	径目30.0	浅橙5YR8/3		20 伝唐津
29		瓦質土器壺	径25.2	灰白10YR8/2		30
30		磁器染付筒	径目10.8			15 初瀬伊万里
31	埴裏-02	土師器羽釜	径目21.2	浅黄緑10YR8/3		20 大和H2型単-3型式
32		瓦質土器壺	径39.4	浅橙5YR8/4		25
33		陶器鉄地壺	径目12.5	灰白10YR8/1		5 志野
34		磁器染付筒	径目11.6 径底4.4 高5.5			40 唐文
35		陶器筒	径7.8 径底3.9 高2.9	灰白5Y8/1		70 唐津系
36		磁器染付筒	径目11.2 径底4.6 高5.1			100 梅枝文、鼠入か
37		陶器天目茶碗	径4.4	浅黄緑10YR8/3		25 瀬戸・美濃
38		磁器筒	径底5.3			20
39	SX-01 1層	磁器染付筒	径目10.3			15
40		陶器鉢鉢	径目28.8	赤橙10R8/6		10 伝唐津
41		瓦質土器鉢鉢	径目26.8	灰白10YR8/1		10
42		瓦質土器鉢鉢	径目23.4	灰白10YR8/1		10
43		動物形土製品		浅黄緑10YR8/3		20 牛形
44		動物形土製品		(伊)浅黄緑210YR8/3(内)灰白7.5YR8/6		20 43と同一個体か
45		陶器皿	径底7.5	内)浅橙5YR8/4		10 唐津
46		磁器染付筒	径底5.0			10
47	SX-01 2層	磁器染付筒	径底4.8			10 草花文
48		瓦質土器鉢鉢	径目20.4	灰白N8/		20 小形鉢鉢
49		土師器羽釜	径目20.4	浅黄緑10YR8/3		15 大和H2型単-2型式
50		土師器焙烙	径目32.2	灰白・黄緑10YR7/3		30 内瀬
51		土師器焙烙	径目32.2	灰白・橙5YR7/4		30 内瀬
52	SX-01 1層	土師器焙烙	径目32.6	灰白・橙5YR7/4		25 内瀬
53		土師器焙烙	径目32.0	灰白・黄緑10YR7/3		25 内瀬
54		土師器焙烙	径目32.6	灰白・黄緑10YR7/4		25 内瀬
55		土師器焙烙	径目35.4	灰白・黄緑10YR7/4		20 内瀬

表1 遺物観察表①

56	SK-02	瓦製土器土器鉢	復口39.0	灰白5Y8/1	10
57	SK-01	陶器甕	復口38.0	黄粉灰白10Y8/2	15 鉄粉
58	SK-02	青磁甕	復底4.6	灰白10Y8/2	10 緑釉、青色や平不良
59		青磁甕	復底4.9	灰白2.5Y8/2	10 緑釉
60	SK-03	土師器蓋	口72	透黄緑10Y8/3	80 灯明皿
61		土師器蓋	復口10.6	黄粉10Y8/4/1	20 全体に煤付着
62		磁器染付甕	復口10.8 底4.2 高5.6		40 青色染いり、青磁染付か
63		磁器染付甕	口11.4 底4.4 高6.4		95
64		陶器甕	底3.1	灰白5Y8/2	10 灰釉
65		磁器染付甕	復口12.0		5
66		磁器染付甕	復口19.8		10
67	陶器甕	復口33.6	黄粉灰白N8/	5 鉄粉	
68	SK-03	陶器甕	復口14.2	灰白10Y8/1	5 鉄粉
69		磁器染付紅皿	復底6.5		10 小町紅(一部字体残る)
70		陶器鉄輪甕	復口13.0 底4.7 高4.7	透黄2.5Y8/10	40 見込山吹文
71		磁器染付甕	底4.0		30 見込み地の目録割ぎ
72	SK-04	磁器色絵染付甕	復口9.9 底3.6 高5.3		50 甕戸、鉄粉あり
73		磁器染付甕	口10.1 底4.0 高5.4		90 甕戸
74		磁器染付甕	口10.7 底4.4 高6.0		70 甕戸
75		磁器染付甕	口10.7 底3.7 高5.7		70 甕戸
76		磁器染付甕	口11.4 底4.6 高6.2		90 甕戸、硝子燗
77		磁器染付甕	口10.5 底4.2 高5.7		80 肥前、地の目録割ぎ
78		磁器染付甕	口7.1 高2.4		60 甕戸、硝子燗蓋
79		磁器染付小甕	復口6.8 底2.9 高3.5		40 甕戸、硝子燗
80		磁器染付小甕	口6.8 底2.6 高3.5		70 甕戸、硝子燗
81		磁器染付小甕	口7.5 底3.1 高4.0		85 甕戸、硝子燗
82		磁器染付甕	口10.5 底4.2 高5.8		85 甕戸、硝子燗
83		磁器染付甕	口10.5 底4.2 高5.8		85 甕戸、硝子燗
84		磁器染付小甕	口7.8 底2.2 高4.3		85 肥前
85		磁器染付小皿	復口9.4 底4.6 高2.8		70 肥前、地の目録割ぎ
86		磁器染付小皿	口9.6 底4.6 高2.8		95 肥前、地の目録割ぎ
87		磁器染付甕	口9.5 底3.5 高4.8		85 肥前、地の目録割ぎ
88		磁器染付甕	口9.8 底4.0 高5.4		90 肥前
89		磁器染付甕	口10.1 底4.1 高5.8		80 肥前
90		磁器染付甕	口10.0 底4.2 高2.9		90 肥前、91の蓋
91		磁器染付甕	口11.2 底4.3 高6.1		90 肥前、焼締跡による記入有
92		磁器染付蓋	復口10.0 底4.0 高2.8		85 肥前
93		磁器染付甕	復口11.7		40 肥前
94		磁器染付甕	口10.1 底3.6 高5.8		70 肥前
95		磁器色絵染	復底5.6		15 肥前、広東燗
96		磁器染付甕	復口11.0 復底5.3 高5.8		5 肥前、広東燗
97		磁器染付甕	復口10.6 底5.8 高6.1		40 甕戸、広東燗
98		磁器染付甕	復口11.4 底5.6 高6.4		40 甕戸、広東燗
99		磁器染付甕	口11.5 底5.0 高6.4		80 甕戸、広東燗
100		磁器染付甕	口12.6 底6.2 高6.3		35 甕戸、広東燗
101		磁器染付甕	復口10.2 底4.8 高5.7		40 肥前、広東燗
102		磁器染付甕	復口10.8 底5.5 高6.1		30 甕戸、広東燗
103		磁器染付甕	復口10.8 底5.5 高6.1		30 甕戸、広東燗
104		磁器染付甕	口11.1 底5.2 高6.6		85 肥前、広東燗
105		磁器染付甕	口11.4 底5.2 高6.3		65 肥前、広東燗
106	磁器染付甕	復口11.0 底5.8 高6.5		60 肥前、広東燗	
107	磁器染付甕	口11.0 底5.2 高5.9		85 肥前、広東燗	
108	磁器染付甕	復口10.6 底4.8 高6.1		30 甕戸、広東燗	
109	磁器染付甕	復口10.8 底5.4 高5.8		60 肥前?、広東燗	
110	磁器染付甕	復口11.0 底5.2 高6.4		50 甕戸、広東燗	

表2 遺物観察表②

111	磁器染付黄	L11.0 底5.5 高7.0			
112	磁器染付黄	□10.1 底5.5 高7.5			
113	磁器染付黄	□9.8 底5.0 高5.8			
114	磁器染付黄	復口10.5 底5.0 高6.4			
115	磁器染付黄	□10.8 底5.7 高6.2			
116	磁器染付黄	□11.4 底5.2 高6.8			
117	白磁紅蓮	□5.4 底2.0 高2.1			
118	白磁紅蓮	□6.2 底1.9 高2.6			
119	磁器染付紅血	復L16.3 底2.3 高2.8			
120	白磁紅蓮	□6.3 底2.4 高3.2			
121	磁器赤輪染付紅血	□5.8 底2.6 高3.2			
122	磁器染付水濁	長9.0 短6.6 高3.6			
123	陶器行平鍋蓋	復口12.4 底3.2 高3.2	備灰10Y6/1 備付明焼7.5YR5/6		
124	陶器行平鍋蓋	復口12.8 底3.4 高3.5	備灰10Y6/1 備付焼黄2.5Y7/4		
125	陶器行平鍋蓋	復口13.4 底3.4 高3.5	備灰オリーブ5Y5/3 備付赤黄緑10YR7/4		
126	陶器行平鍋蓋	復口15.0 底3.8 高3.8	備灰オリーブ灰10Y5/2 備付赤黄緑10YR4/3		
127	陶器行平鍋蓋	復口15.6 底3.7 高3.6	備灰オリーブ5Y5/3 備付赤黄緑2.5Y6/3		
128	陶器行平鍋蓋	□10.4 底5.8	備灰オリーブ5Y6/2 備付赤黄緑10YR7/3		
129	陶器行平鍋蓋	□17.0 底6.9 高8.5	備灰オリーブ7.5Y5/3 備付黄2.5Y6/2		
130	陶器行平鍋蓋	復口16.4 高5.1	備付赤黄10R3/3		
131	陶器行平鍋蓋	復口18.0	備付赤黄2.5YR3/2 備付焼7.5YR7/6		
132	陶器平碗	復口11.5 復底3.2 高3.9	備付黒焼7.5YR2/2 備付赤黄緑10YR7/3		
133	陶器平碗	□11.8 底4.8 高4	備付黒焼7.5YR2/2 備付赤黄緑10YR7/3		
134	陶器碗	復口8.0 底3.6 高5.3	備灰オリーブ7.5Y5/2 備付赤黄緑10YR7/3		
135	陶器碗	復口10.6 底4.5 高4.8	備付緑灰10G6/1 備付赤黄緑10YR7/3		
136	陶器皿	復口11.2 底2.3 復底3.8	備灰白5Y7/1 備灰白2.5Y8/2		
137	陶器土瓶蓋	復大9.2 高1.4	備灰白5Y7/1 備灰白2.5Y8/2		
138	陶器土瓶蓋	大8.4 高2.1	備付焼黄7.5YR3/4 備付灰白7.5YR7/1		
139	陶器土瓶蓋	大11.3 高2.7	備付黒10YR1.7/1 備付赤黄7.5YR7/4		
140	陶器土瓶蓋	大11.8 高2.7	備灰オリーブ7.5Y5/2 備付赤黄緑10YR6/4		
141	陶器土瓶蓋	大12.8 高3.3	備灰10Y6/1 備付黄緑10YR5/2		
142	陶器土瓶	L18.8 底7.7 高14.0	備灰オリーブ7.5Y5/3 備付黄緑10YR5/2		
143	陶器土瓶	□8.0	備付黒2.5YR1.7/1 備付焼黄7.5YR7/6		
144	陶器土瓶	□6.0 底5.6 高11.3	備灰オリーブ灰50Y6/1 備灰白5Y7/1		
145	陶器土瓶蓋	大11.6 高3.8	備付黄緑2.5Y5/4 備付黄緑10YR8/6		
146	陶器土瓶蓋	底5.1 高10.8	備灰オリーブ5Y5/3 備付焼黄7.5YR4/1		
147	陶器皿	復L19.4 高2.9 復底4.1	備灰白7.5Y8/1 備付焼7.5YR6/6		
148	陶器皿	復口9.2 高3.0 復底3.5	備灰オリーブ7.5Y4/2 備付赤黄7.5YR6/4		
149	陶器皿	□9.0 底3.6 高2.3	備灰白2.5Y8/2 備付焼黄2.5Y8/3		
150	陶器皿	□9.4 底3.4 高2.7	備灰白7.5Y7/1 備付灰白2.5Y8/1		
151	陶器皿	□9.6 底3.8 高2.7	備灰白7.5Y7/2 備灰白2.5Y8/2		
152	陶器皿	□9.4 底2.7 高3.1	備灰白5Y7/2 備灰白5Y8/1		
153	陶器皿	復口9.5 底3.1 高2.9	備灰オリーブ5Y5/2 備付赤黄7.5YR7/4		
154	陶器皿	□7.2 底3.9 高2.2	備灰白5Y7/2 備灰白2.5Y8/2		
155	陶器皿	復口9.6 高2.8 底4.0	備灰オリーブ7.5Y4/2 備付赤黄7.5YR6/3		
156	陶器皿	□7.89 底4.3 高2.9	備灰オリーブ7.5Y5/3 備付赤黄7.5YR5/4		
157	陶器鉢	□19.2	備灰白2.5Y8/2 備付焼黄10YR8/3		
158	陶器鉢	復口23.0 高10.5	備灰白5Y7/2 備灰白2.5Y8/2		
159	陶器火鉢	復口17.4 高18.2	備灰白5Y7/1 備灰白5Y7/1		
160	陶器鉢	復口19.8	備付黒7.5YR1.7/1 備付焼7.5YR7/6		
161	陶器土瓶蓋	大12.2 高3.6	備灰5Y6/1 備付赤黄緑10YR5/4		
162	陶器土瓶		備灰5Y6/1 備付赤黄緑10YR6/4		
163	陶器徳利	底8.2	備灰白5Y8/2 備灰白2.5Y8/1		
164	陶器徳利	底9.9	備付焼黄赤黄5YR2/3 備付灰5Y1/4		
165	陶器徳利	復口34.8	灰濁5YR4/2		
60	瀬戸、広東陶				
95	瀬戸、広東陶、113と揃				
80	瀬戸、広東陶				
60	瀬戸、広東陶、焼銀ぎや				
70	瀬戸、広東陶				
45	瀬戸、広東陶				
100	型造り				
75					
60	肥前				
70					
100	肥前				
70	型造り				
45					
50					
50	内面染変色より発色				
55	口縁輪部に白磁塗布				
45	内面染変色より発色				
40					
55	イッチン塗布、内面染変				
20	底部染付着				
45	印跡入り消し痕跡有				
90	印跡入り消し痕跡有				
40	イッチン塗布				
30	輪花形、印跡入り消し痕跡有				
30					
40					
100					
65					
80	印跡入り消し痕跡有				
60					
	高灰染出し掛け				
65					
75	鉄輪加により「大」字				
60	巾着形?輪花形口縁				
45	口縁刷毛目				
60	鉄輪				
55	鉄輪				
50	鉄輪				
50	鉄輪				
45	輪花形口縁、白磁刷毛目				
50					
45	白磁刷毛目				
40	白磁刷毛目				
60					
45	底部外側に黒書(字体不明)				
45	三彩輪(白・緑・青)焼附け				
30	高灰染出し掛け				
60	乾乾形つまみ、印「龍妙山」				
	鉄輪、162とセット				
80	鉄輪				
40					
30	埴形鐵輪鉢蓋式				

表3 遺物観察表③

166	SK-04	陶器指鉢	復口36.4	明赤縄2.5YR5/6	20	堺焼指鉢Ⅲ形式
167		陶器指鉢	復口23.2 高11.0	にぶい赤縄2.5YR4/3	40	堺焼指鉢Ⅲ形式
168		陶器指鉢	復口36.0 高14.4	赤縄2.5YR4/8	25	堺焼指鉢Ⅲ形式
169		陶器指鉢	復口33.4 高14.5	明赤縄2.5YR5/6	40	堺焼指鉢Ⅲ形式
170		不明土製品		灰縄7.5YR5/2		スタンプとヘラ痕を併用
171		不明土製品		にぶい赤5YR6/4		連続スタンプによる亀甲文
172		土師器焙烙	復口38.2	灰黄縄10YR5/2	25	凡類
173		土師器焙烙	復口38.6	灰黄縄10YR6/2	25	凡類
174		瓦質土器刷	復口28.2 高24.5	灰白10Y7/1	25	凡類
175		瓦質土器土管	復口11.8	灰白2.5Y8/1		直入
176		瓦質土器角形火鉢		灰口5Y7/1		直入
177	石段西側堆積層	陶器甕?		(胎)黒縄5YR2/		
178		磁器碗	復口9.0 高3.9 復底3.9		30	瀬戸、雑反碗
179		磁器碗	復口9.5 高5.0 復底3.8		20	肥前
180	第3包含層	土師器焙烙	復口30.6	にぶい赤7.5YR7/4	20	凡類
181		土師器皿	口6.4 高1.1	にぶい黄橙10YR7/4	100	灯明皿
182		土師器皿	口9.8	洗黄縄10YR6/3	30	
183		磁器灰付碗	復口12.3		10	
184		瓦質土器火消器	復口14.4 高15.5	灰白10Y8/1	50	
185	第2包含層	磁器灰付碗	復口10.8 底4.2 高6.0		20	
186		磁器灰付碗	復口11.2 底4.3 高5.6		40	
187		磁器灰付碗	復口12.4 底4.5 高5.4		60	
188		土師器皿	復口8.6 高1.0	黒5YR6/6	50	
189		陶器土器蓋	大10.7 高2.6	(胎)にぶい赤7.5YR7/4	90	
190		陶器皿	復口10.0 高2.7 復底4.3	(胎)オリーブ灰10Y8/2 (胎)黒5YR7/6	40	見込みイッチン磁文様
191		磁器灰付皿	復口13.3 底2.2 高2.5		30	
192		陶器行平鏡板	口14.8 底5.0 高4.6	(胎)赤灰10R5/1	90	193とセット
193		陶器行平鏡	口15.8 底6.6 高9.3	(胎)灰黄縄10YR6/2	95	
194		土師器焙烙	復口33.6	黒5YR7/6	20	

表4 遺物観察表④

【凡例】

1 表中で使用している略称については、以下の通りである。

口：口縁 復口：復元口径 底：底部径 復底：復元底部径 高：器高 (胎)：胎土色調 (釉)：釉薬色調

2 色調は、『新版標準土色帖』に拠る。

3 表中の遺物番号と本文中の遺物報告番号は一致する。

4 表中で使用している編年・分類については、以下の文献に拠った。

○土師器羽釜：川口宏海「16世紀における大和型土釜の動向」『中近世土器の基礎研究』VI,1990

○瓦質土器指鉢：佐藤聖型「大和における瓦質土器の展開と画期」『中近世土器の基礎研究』XI,1996

○堺焼指鉢：白神典之「堺指鉢考」『東洋陶磁』19,1992

○土師器焙烙：難波洋三「市坂の土器作り」『京都大学構内遺跡調査研究年報1986年度』京都大学埋蔵文化財センター,1989

○藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅱ-古瀬戸後期の編年」『瀬戸市歴史民俗資料館研究報告X』1991

No	出土遺構等	瓦当文様	瓦文数	色調	瓦当残存率	直径	内径径	外縁幅	深さ	備考
K1	SE-01 1層	右三巴文		灰白・黄緑10YR8/4	60%	158		16	13	K1と関係
K2		右三巴文		灰白・黄緑10YR8/4	60%	150		15	14	
K18	SX-01	左三巴文	13	灰白N7/10	80%	147	100	21	5	瓦当裏面に灰付着
K25	SX-04	左三巴文	15	灰白N8/	100%	141	95	20	6	
K26		左三巴文		灰白N7/2	70%	144	100	20	6	

表5 軒瓦瓦計測表

No	出土遺構等	瓦当文様	色調	瓦当残存率	瓦当厚	内区厚	上縁幅	下縁幅	備考	
K3	SE-01 1層	透珠文	灰5Y5/1	20%	35	19			受胎痕跡	
K4		透珠文	灰白N6/1	70%	36	20	182		内区左端に陥傷	
K5		透珠文	灰白N6/1	70%	36	19	180	185	K5と陥傷一致	
K6		透珠文	オリーブR2.5GY5/1	40%					K5と陥傷一致	
K7		均整唐草文	浅黄緑7.5YR8/6	20%	47	25				
K8		均整唐草文	橙7.5YR7/6	10%		25				
K9		均整唐草文	褐灰10YR5/1	30%	49	26				
K19		SX-01	均整唐草文	灰白N8/	30%					中心部削
K20			均整唐草文	灰C12.5Y8/1	30%					中心部削
K21	均整唐草文		灰白N8/	40%	36	22			中心部削	
K22	均整唐草文		灰白N8/	95%	45	30		240	中心部削	
K23	均整唐草文		淡黄5YR8/4	30%	34	20				
K24	均整唐草文		灰白N8/	20%	32	23				
K27	SX-04	均整唐草文	灰白5Y8/1	90%	36	21		222	中心部削	
K28		均整唐草文	灰白7.5Y7/1	30%	37	23			中心部削	
K29		均整唐草文	オリーブR2.5GY6/1	40%	42	24				

表6 軒平瓦計測表

No	出土遺構等	色調	残存率	工録長	玉録幅	広縁幅	狭縁幅	瓦深	
K10	SE-01 1層	切赤緑2.5YR5/6	20%						
K11		黄緑10YR8/6	30%	50	113	160			
K12		浅黄緑7.5YR8/6	30%	50	119	155			
K13		灰白N4/1	30%				146		
K14		灰白N6/1	20%	49	111	147			
K15		橙2.5YR8/8	20%					215	53
K16		灰白N5/1	30%					215	56

表7 丸瓦・平瓦計測表

№	出土遺構等	種類	外径	内径	方孔	厚	備考
C-1	第1トレンチ包含層	瓦本遺貨	24.8	21.2	6.8	1.2	新発見
C-2		不明	23.9	19.3	6.1	1.8	
C-3	第2トレンチ包含層	瓦本遺貨	21.7		6.4	1.1	新発見、外縁を研摩

表8 銭貨計測表

報告書抄録

ふりがな	つついじょうだい7じはつつちようさほうこくしょ							
書名	筒井城第7次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	大和郡山市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	10							
編著者名	山川均・長谷川義明							
編集機関	大和郡山市教育委員会							
所在地	〒639-1198 奈良県大和郡山市北郡山町248-4							
発行年月日	2006年6月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
筒井城第7次	奈良県 大和郡山市 筒井町 野上町 字北垣内 1503	29203		34° 37° 20°	135° 46° 57°	2004.1.19 ~ 2004.3.31	260	範囲確認
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
筒井城第7次	城跡	中世～近世	井戸(14c末～15c初頭)、 土坑(19世紀)、石垣、埋壕 (17c)		土器、陶磁器、瓦、 石造物、銭貨	幕末の一括廃棄土坑を 検出。		

大和郡山市文化財調査報告書第10集

筒井城第7次発掘調査報告書

平成18年6月30日

編集・発行 大和郡山市教育委員会

大和郡山市北郡山町248-4

印刷 株式会社 昭文社